

關八州繫馬

近松門左衛門作

改むるは君臣の常道。所存残さず、フシ奏

聞。あるべしとぞ仰せける。頼光慎んで。

怪しきを見て怪まざれば。怪み却つて壞る

とかや。調古へ宇多の天皇の御在位。金岡

の大納言が書きたる馬。夜毎に出でて秋の

戸の萩を喰ひ荒し。異國には吳道子が繪。

主の僧を惱ませし類。名筆名作の畫圖。彫

刻に魂入りし例數を知らず。地先祖經基孫

王。鹿を射られし武功を傳へたる頼光。た

とへ其の馬生あればとて天威を頂き。繪言

と呼ばはつて藝目一矢仕らば。やはか仕損

じ候はん。況んや神にもせよ鬼にもせよ現

す所の形は畜類。某が手を下すに及ばず。

召連れし二人の武士たやすく計らひ候はん

と。返答大様大鳥の。羽繕ひする綱金時鬼

でもござれ蛇でもござれ。相手の強いが好

物珍物。勇みに勇む面魂。雲の上人力を

得。此の頃怖がる牛飼舎人火焚の衛士に至

る迄。誠に餅は餅屋ちやと。フシ宮中悦び

勇みける。地其の日も既に午の刻限。昨日

形水は石が鑽に非ずして。泰山の巖を穿ち。索は木が鑽に非ずして。彈極の鞭、幹を断る。積惡累徳始めにある事なし。されば浸潤の證廣受の愆。行はれざる明王の。御代傳はりて六十六代。一條の院未だ七歳の幼主として。五事七政を秋津洲に。オロシ、施し給ふぞ。有難き。地東三條兼家公萬機を攝政し。參議江文の爲成卿参り議の職に進み。六孫王の嫡流鎮守府の將軍。源頼光父祖の業を繼いで。君文を以て四夷を撫で。臣武を以て八蠻を鎮めしかば。行く者途に棄てたるを拾はず。耕す者耕つて謳ひ。四門恩々として。フシ和らぐ。民とは此の時なり。地頃は永延二年更衣中旬。武將頼光別勅の召によつて參内ある。御供の武士には渡邊の綱。調度掛とし

て雷上籐の御弓。坂田の公時籠の役。半臂に腹巻烏帽子懸し黒漆の。大太刀佩きて左下に隨ひ。フシ床子の座にぞ何候ある。地殿下兼家公御座近く召され。御召さるゝ條餘の儀にあらす。去んぬる頃より宮中に不思議の變化。形は尋常黒の駒。刻限も午の時。いつくより來るともなく御垣の許にあり。左近右近の木元に飛狂ひ跳ね廻り。殿上臺盤へも駈上らん勢に高嘶き。左右馬寮の官人馬部の仕丁組留めん。繫ぎとめんと追廻せども。眼に遮るばかりにて手に取られず。地有驗の高僧貴僧に仰せ大法秘法を修せらるれども。更に其の驗なし。君幼く清濁を分たせ給はぬ叡慮に。不徳の御誤あるべきやうなし。かゝる妖怪は攝政たる兼家が責一人に歸す。諫を奉り非を

の頃ぞといふ間もなく。内教坊の後より嘶き出づる悪馬の相形。須彌の驚蹄を隠し。

耳は法螺貝眼は銅鏡鼻の嵐は海風の。千里の砂を吹立てく。龍象の波を蹴立つる四足の働き。惡來が多力にも、フシ止めつべうは見えざりけり。公時苛つて踏んばたかり。平頭擱んで引寄すれば。ひらりと飛ぶを得たりやおうと渡邊が。障泥ずりをしつかと抱くかい潜つて駈出だす。二人が掛聲嘶うる馬牧の。野取の三重へ如くなり。地賴光驥がす弓矢おつ取り大音あけ。調清和天皇四代の孫。多田の新發意滿仲が嫡子。鎮守府の將軍兼攝津守源賴光と。地三度名乗つて鎬矢取つて打番ひ。よつ引き丁ど放せば過たす。龍馬の三高ずはと射抜かれ喚き苦しむ伏すと見えしが。俄に風おち電光形も消えて失せければ。月卿雲客射たりや射たり賴光。日本の養由と、フシ上下さ。めき悦びあふ。地攝政殿立出で給ひ。調賴光の武功今に始めず。地綱金時が勇力

重ねて恩賞あるべし。但し化生の出所を知らず此の事ト占あるべしと。トの博士伴の別當を召さるれば勅に應じオクリ御階の。

下に伺候する。地參議爲成出向ひ。化生は只今武將の矢先に鎮つたり。此の變化の本體。障碍をなすに由來あるべし。占仕れとありければ。地別當長つて懐中の祕書取出し。天地に俯仰し三才に練り合せ暫く考へ。調ム、ウ震の卦を下にし。離の卦を上にする。噬嗑の卦と申すに當つて候易に曰く。頤の中に物あり。噬み嚙せて而して後に亨ると云々。是を以て考ふれば天下は口中物は惡なり。此の惡を噬み調へ天下の脾胃に入る時は。天晴國家の御大事。方角は御殿の辰巳に一物あるべし。地御詮議あれと、フシ見通すやうにぞ占ひける。地詞に應じ大宮人大藏省の被官御藏を聞き尋ねれば一合の唐櫃に。賴光の放てる矢。鎬碎けて筥中迄こそ立つたりけれ。人々立寄り見給ふに。天慶三年三月日とばかりにて。

事の差別も分きがたく、フシ重ねて不思議を増しにける。地賴光具に明察あり。此の書付の年號年月を考ふるに。朱雀院の御宇。平親王將門が亡びし時に相當る。傳へ聞く將門が厩の邊に客星落ちて龍馬と成る。是我が身を立つべき吉相。相馬の家の軍神馬頭大明神と尊仰し。地其の由緒によつて旗指物の紋所。隠れなき相馬の家の繫馬。調然るに承平年中より關東に蔓り。既に王位を覆さんとせし所。依藤太藤原の秀郷是を誅伐し。其の證に獻じたる將門が旗指物。

此の櫃に納まりしと存するに違ふ所あらまじ。地彼の將門が末子成人し。密かに將軍太郎良門と名乗り。或は民家に押入り強盜。又は山野に山賊して財寶を奪ひ。籠城の端を顯す由。地賴光が謀の者ども告げ知らす。親子同氣を相求むるの奇特。將門が魂入つたる幕の紋の馬。此の時を得たると覺え候。免許を蒙り今日より。洛中を夜廻り致させ非常を糺し。將軍太郎が銳氣を取

揮ぎ。いよく四海太平の忠勤を拙て奉らんと。辯舌流るゝ水鏡フシ行く先見抜き奏せらる。織政殿を始めとして三公九卿八座七辨。百官百僚に至る迄武勇明察誠に清和の嫡孫やと。フシあつと感するばかりなり。地いでく櫃を開き證據を顯すべしと。蓋を開けば頼光の。詞に違はぬ旗印。繫馬の幕の紋五幅がかりに染込みしは。相馬の家の總領のフシ印も見えて目ざましし。猶敬愍の天盃。幕旗印は江文の宰相に預け置かる。家に納めて守られよ。頼光は數代の勳功。國家の政道大小となく任せ仰せ下さるゝ。然れども未だ家督の定めなし。弟河内守頼信三男出羽冠者頼平二人の内。御邊が心に適ひし者家督に立て。重ねて奏聞あるべしと氏の譽身の面目。世に類なき繪言に。悦びの袖を左右左の大内に翻す。幕は相馬の紋なれど唐土迄も我が朝の。源氏の門に繫ぎ馬なつく。民こそ三入豊かなれ。地武將頼光將門が

執念の變化を治め給ひしより。威勢目を追つていやまさり。御舍弟二人の内家督たるべしとの勅諭。今夜其の沙汰あるべしと小寢殿の大床に。八幡宮を勸請あり白羽の矢三十三筋染羽の矢三十三筋。合せて六十六箇國の棟梁たるべき。表示をしめす御注連繩。和光の銀燭明々とフシ神慮も納受なからめや。御臺所御座に着き給へば。平井保昌罷出で。御仰に任せ御譜代相傳の諸武士。季武貞光を始め残らず大廣間に相詰め候。但し綱公時兩人は洛中夜廻りの役人。不參に候と申し上げれば御機嫌よく。兩人の御舍弟達劣らぬ御器量。頼光の御心に何れを何れと別ち難し。大將たる身は心行跡天に叶ひ。士卒萬民の歸伏の徳備らでは。家督には定め難しとて八幡宮を勸請し。地源家由緒の諸侍を集め此の間の火を消し。供への矢を一人に一筋づつ。御蘭として探り取らせ。一筋にても白羽多くは頼信。染羽多くは頼平との定め暗闇の業。

私の最良偏頗もならぬ筈。皆神慮の御計らひ。此の御蘭の矢の取り裁きも。御家久しき其方。四天王の衆が承る筈なれども。男たる身は面々の私にて。豫て矢に覺えの印を附け置いたなどと。諸武士の褒貶やかましく。今宵此の場一通りの用事は其の小蝶に言ひ付けし。先づ頼信殿頼平殿。八幡宮の御拜なさるゝやうに申してたも。地委しき事は小蝶に萬事言ひ付けし。聞合せて御家督定め。首尾よいやうに頼むぞと御座を立つて入り給へば。保昌は御兄弟の御部屋へに參りける。小蝶が跡に獨り笑み。知れぬは仕合頼信様に此の年月。砂地の雨滴ほれて。惚れ込んだ忍び涙。上と下との恐れを憚り。色に出す折も無かりしに。八幡様御拜に只今是へお出で。サア今宵こそ戀の花の開け時。頼信様に折つてなりともちぎつてなりとも貰ひましたら。ア、ぞつこんなから嬉しかろ。忝からソリヤ。地糸いがござるわと。ときめく内に

頼信朝臣。裝束更め床に向ひ拍手の音。

高天原に神とどまりまします。詞鳥帽子の

殿ぶり中臣秘のお聲の色どうも堪らぬ。と

んとかう抱付いてのけうか飛付いて頼すり

か。ヲ、辛氣。ちと此方向かんせかし。地ち

よつと觸つて戴く我が手。御直垂の留伽

羅。詞ム、ゆかしい薫や。フンくム、い

としらしい匂ちや。ヲ、辛氣。なぜにやら

氣がせく。顔もほかつく。地氣あがりもだ

く。退いつ觸つつわなに油の若鼠。戯ゆ

る狐腰をよぢらす。心をもちらす亂れ足

許。怪我の功名滑つた顔。もたれかゝつて

ひつたり抱付く。頼信驚き振返る顔と顔。

スエテ何と詞の機もなく。詞ア、ほんに私が

やうな粗相な。ひよつと滑つて抱付きま

し。お慮外なついお前に惚れうとした。地

御免なしてとばかりにて。フシ差うつ。向

いてゐたりしが。心を鎖め小聲になり。詞

いつぞはく密に申上げ度いと心に積るば

つかり。地お顔を見れば氣後れして。わけ

てはどうも申されずといへば頼信打領き。

詞ム、皆近いふな合點々々。我に言ひ度き

事ありとは此の方にも覺え有り。聞けば江

文の宰相へ懇に出入るとや。彼の娘詠歌

の姫と人知れず文を通はし。互の心は合ひ

ながら。地頼信が此の身から軽々しくも忍

ばれず。姫も心遣る瀬なく頼まれしは其の

事よな。詞かねく密かに四天王にも言ひ

聞かせ頼光御夫婦の御耳へも入れ置きし。

地今宵家督定め品の品により。我が妻に迎へ

取るべし。心せかす待たれよと懇に傳へて

くれ。人も聞くかとかどからず。萬事小蝶

に任せ置く。頼むくくと。フシ言ひ捨て奥に

入り給ふ。地小蝶ほうど怪顛して。詞こり

やどうちや。是程にも當が違ふか。地そも

思ひ初めしより御前へ出ては胸を焦し。局

へ下りては心を碎き。一夜も安う寝る間

もなく。幾せの心を盡せども若しやくの

頼みばかり。奉公も苦ならず。人に勝

れ勤め神といへば願を立て。佛といへば頼

みをかけ。千筋萬筋の佛神の願ひの絲。今

宵一度にはらりつと切れ果てた。詞エ、恨

めしい詠歌の姫。常は裏なく目かけぶり。

此の事ばつかりを隠し置いてよう出し抜か

れた。地悟氣に位の高下はない。待て此の

戀を妨げ一本させて腹癒せ。エ、腹が立つ

と心の亂れ。身を削る楯形の戸口よりスエテ

何心なく頼平君。床の前に畏り。烏帽子を

傾け禮拜の。直垂の袖そつと控へ。詞時節

悪い事ながら。引かれぬお方に頼まれ届け

ぬも如何と。お心も願す申し上げます。江

文の宰相爲成卿の娘御詠歌の姫様。たんと

お前を思ひ込み。お煩ひに成る程私が参る

度毎にお部屋へ召され。小蝶頼む。頼平様

と詠歌が中の妻迎へ舟。地年に一度は奢の

沙汰。せめて一代に一度の逢ふ夜を。引き

台せてくれと御意なされ。詞それはく深

いお心。地お情あらば私も共にと言ひも切

らさず待てく。詞詠歌の姫は白馬の節會

のお庭で見初め。我も心にかゝれども。地兄

頼信深い中と聞くものを。それがどうもと赤らめ給ふ御顔ばせ。調ア、其の御遠慮入らぬ事。尤かし頼信様。一兩度玉章は付けられしが。詠歌様も心に染まらず、頼信様もしかとお心に取しめた事でもなし。ほんの時の一興。若し眞實事なれば、媒の小蝶が一分も立たぬ事。地お爲悪しうは致しませぬとさも有りつべう辯舌に。言ひ廻され頼平君。調ハテ道に違はず浮名の立たぬ事ならば。我も戀しき渡りに船。えよいやうに小蝶頼むと宣へば。小蝶が重荷片荷は下りてがつくりと。氣草臥の漏刻オクリ初夜を。告げてぞ聞えたる。地御定めの時分よしと平井の保昌。季武貞光を先として。源家相傳の武士の中物頭分廿八人。素襖袴の袖を連ね。烏帽子を並べて我もくと。フシ座に着けば。地上段に御臺所頼信頼平兩御舍弟。左右に並びおはします。小蝶仰を蒙り。調御の次第は各豫て承知の通り。信をこめて取り給へ。サア、地只今火をしめ

すとさつと披いて羅の。長地扇に撲つは秋の螢火は冬の夜の螢火ならぬ燈火も。消えて銀燭いたづらに。講屏空しく。フシ暗然たり。地人々互に辭儀もなく。聲をも立てず心々にオクリ立寄り。く神に任する旨み。行きつ戻りつ立ち舞ふ内。渡邊の綱が從弟箕田の二郎。御闇の矢を取る床脇に坐したる小蝶が衣の空柱。なまめく薫に心ほれ。お廣間酒の三盃機嫌。覺えずすり寄り振り解けば付け寄つて抱付く。小蝶は頼信公へ脇心なき氣を見せたく。左の手に烏帽子の懸緒。取つてちつと引伸ばし懐中の匕首抜くより早く結び際よりすつかと切り。取つて突退け大聲上げ。調天下大事の御家督定め。神前といひ上々の御座近く。暗紛れの不行儀侍。誰かは知らず小蝶に戯れしなだるゝ不義放埒の曲者。證の爲烏帽子の懸緒を切取つたり。地たつた今其の人を顧さん。サア女中燭臺々々と呼ばれば。一座もはと興さまし。總酒の酔もさ

め南無三寶。腹切らんと柄に手をかけて見て。憎い女め刺殺してやくれん。我ばかりや死なんとせき悶ゆれども人知らず。面々烏帽子の懸緒を探り互の心を疑ひ合ふ。火を見る迄の綱が身の安否。途方にくらむ彌猛心闇の闇路と成りたる所に。頼平君の惻隱の御心に。綱が爲の正八幡。入替り給ひけん御聲高く。調ヤアく、頼平が思ふ仔細あり。率爾に燈火あぐるな。此の座の諸武士一人も残らず。自身烏帽子の懸緒を切り。切揃ふと一度に各聲を揃へて案内せよ。其の時燈火あぐべしと。地いらち給へば違背なく。面々差添の小刀抜いて押切り。調何れも残らず切揃ひ候と。地纒も同然に申し上ぐれば。燈臺燭臺ばらばら。天の岩戸と開くれど。一座の武士に疵つかぬ。フシ大將の心ぞ頼もしき。地幽閑大度の御臺所懸緒の事は御沙汰もなく。各取つたる御闇の矢はへくと御意の内。我もくと御前に差上ぐる。人数廿八人白羽

の矢廿八本。染羽には一人も取り當らぬぞ
フシ不思議なる。一つに取つて頂戴あり。

此の内に一筋も 染羽のなきは頼信殿を
御家督。さし次の弟御なれば世間の順道。

正直の頭に宿る神慮疑ふ所なし。頼平殿
は天下の後見との事ならん。自ら女の身

として只今極めて言ひ難し。奏聞を経て
吉日選び目出たく仰付けられん。先づく

今宵の悦び。保昌季武貞光。地神酒をひ
ろめて酒宴あれと頼信頼平伴ひて。御麻

深く入り給ふ動かぬ御代の固めぞと。末を
白羽の八幡山氏子。榮ゆく 三置 註印キ

オホよき光ぞとかけ頼む。世の光ぞと。頼
む茶のきよのきよひよん。御寺に田螺にき

よひよん。ヲ、井の澤の。澤の寒きさんや
に。ていと打鳴す。三界を家とよ走り走

り廻る鉢こくりが。ヲ、く。五郎三郎。
田舎へお下りあろならば。此の程のなぐり

情に瓢をなりとも置いて行け。小瓢をなり
とも置いて行け。それはや女郎。易き間の

事なりとよ諸國をでつるで。づでんと叩か
うするにも。瓢なうてはお笑止。極樂のホ

ホ。前に流るゝ涙川。いかなる淵の。瀬に
なり天地の恩。國王の恩。よしや世の中

寝てか寤めてか只何事も。後生なりけり
なもうだ。なもだく。彌陀頼む。彌陀の誓

ひを頼む身の。人は雨夜の星なれや。ナホス
フシ雲晴れねども西へ行く。地西の京より東

の京北は一條南は九條。縦横九萬八千軒。
足に任する坂田が夜廻り。洛中を苦しむる

強盗どもを擲めんため。十徳頭巾に身を襲
せば。人も空也の茶筌賣。公時が一生に唱

へ初めの南無阿彌陀佛。なもだく。の鉢叩
き。フシ思案の底も叩くらん。瓢の音さへ

済えたる夜の月も落ちくる西三條。江文の
宰相爲成卿の築地より。軒を打越す細紐に

結び下けし水仙一本。行當り喫驚しコリヤ
何ぢや。アム、疫病の呪ひか。但し洛中物

騒の盜賊の呪ひか。病除の爲ならば南天と
大蒜を吊る筈。ア、聞えた。御公家衆は

花車尋常臭い物は忌み物。大蒜の代りに。
葱に似た水仙ちやの。流石歌人のお見立

て。地何にもせい家裏と手をかけて引きし
やくれば。内に女のおとなふ聲。是は不思

議と又引く綱にあいあいくと。返事も近
付き切戸押明け。立出づる奥女中公時をす

かし見て。戀なればこそ宴せしお姿。お館
の思はく様たんと待兼ねてござんする。い

ざお入りと呼ばれて公時合點行かす。戀
ゆゑ宴すとは何の事。瓢箪一つの軽い世渡

り。御用ならば一本が六文。青竹茶筌でお
茶ちやと立つるを召しませい。叩きの一

節。地面白いを添へますると瓢箪鳴らせば。
ア、殿達はじゃれ深い。隙どれば人も見

る。頼みたる姫君のお疑ひも氣の毒。地憚
りながらお案内と手を取るを振放し。註印キ

ア、是は何とも心得ず。鍋の月代石の鬚。
つひに見た事ない君が。しなだれ給ふは甘

い事。我も岩木にあらねども。内に残せし
山の神。めつたむしやくしや惜氣するぢや

のちやのきよのきよひよん。お腹立つまゝ、
きよひよん。ヲ、怖やの。こはや／＼寒き
山野に。ていと待ちくらして。やがて迎ひ
にでするで。ずでんと撲たれぬ先に。フシ
お暇申すと逃行くを。走寄り縋りとめ。今
宵忍ばん合圖の綱引捨て歸るお心は。おせ
かし振か憎てやと引寄せて差覗く。顔は朱
塗の根來折敷目玉は血録はつと魂消え。
鬼か天狗かなう悲しやと。フシ迷入りはた
とさしにけり。地坊門通りの四つ辻より。
一文字に三星の紋も輝く提灯。二行に鐵棒
ひかせ嚴重に來る行装。ムウ渡邊の綱が
夜廻か。ハテ大さうな出立。地一本させて
笑はんと頭巾深く瓢箪叩き。鉢叩キ大恩教主
の秋の月。涅槃の雲に入るとかや。月夜に
提灯外聞ぢや。一人歩くは怖いなら。なも
だ／＼彌陀頼め。公時頼めと、ナホス地鼻の
先。瓢箪によつと突付け。コリヤ渡邊こ
れ見たか。君命を重んずる公時がや。出
事。又しては智慧なくと叱られても、出

す所では智慧を出す。平親王將門が一將
軍太郎良門。山賊強盜を語りひ洛中を惱す
間。片端から引つ括れと承るは兩人。綱が
鎌鬚。公時が煎蝦色は常是が極印同然。日
本國通用のしやつ面。此の如く形をかへ。
ちやのきよのきよひよんでみしらしめて。
どこそが公時臭いやら盗人どもが寄付か
ぬ。それに引換へけた、ましい提灯鐵棒。
ちんからりが面白い。地家來自慢の僭上
ならば祇園會か放生會の。御輿の供せい渡
邊と、フシかつらくと笑ひける。綱につこ
ともせず。ホ、。小智は大道の妨げ。大
國を治むるは小鮮を養るが如く。雑魚小鮒
養るにいらひ過せば。鱒も鱒も一つに崩
れ其の魚の形を失ふ。公の政道まつ其の如
く。其の職に居て政道を取行ふ役人の心
持。近う言はば重箱を插木で洗ふやうにす
るもの。國を重箱に譬へ政道を插木に表
し。彼の重箱を洗ふが如く。角々へやり居
けず大様にもてなせば。器も損せず國全し

これ聖代の政。愚者の政道は細かにて。角
角迄洗ひ届けんとする故。重箱も損ね國危
し。家に鼠國に盗人。百二百斬捨てても盡
くる事なき湧き物。内に仁愛を施し。外敵
しく醫固せば刃も用ひず徳に隨ひ。自ら治
まる道理。合點がいたか坂田殿。ちやのき
よのきよひよんの分別。地とひよんもない
無分別と一口に打込めば。公時顔はくら
せども道理に詰る返答なく。ちんぶんかん
此方や知らぬ。重箱と插木瓢箪と茶筌と。
何れものかぬ御中なれど手柄は仕勝ち。き
よひよんかとひよんか鉢叩きの。仕上を見
いとへらず口。オッリ別れて。こそは行く水
に。フシ數書くよりも。はかなきは。思はぬ
人を思ひ川鶺ははかろきならぬ翅のゆかり。ホ、フシ小
蝶を橋と踏み迷ふ。出羽の冠者賴平詠歌の
姫に豫てより。思ひ亂るゝばさら髪烏帽子
も堅しと脱ぎ捨てる。姿は如何に男とは。
いさ白絹を打被き。フシ築地の外面に忍ばる
る。ココレ小蝶。媒の心遣ひ忍ぶ夜の案

内。地禮は詞に盡されぬいよく頼むと宜へば。阿、何のお禮。もと此の戀は。此の小蝶が頼信様に底心から。命かけて思ふ故。詠歌様と頼信様の。手を切らねば私が戀は叶はぬ。折に幸詠歌様も頼信様には見ぬ戀なり。餘りお心も進まぬ所を見付けて。お前の戀を取組んだ。さり乍ら先づ今宵の新枕は。頼平と極めずとも。地信と平とをどぢぐぢに。頼様々々で紛らかしお枕二つのお床入り。一汗かいた其の上は尾が出ようが臍が出ようが。それから此方の物これ此の築地が彼の様の。花に引かるゝ合圖の糸と引けば引かるゝ頼平も。心はどきどきつき乍ら出汐に出船の乗りかゝり。小ざかしげに腰元がこちへと招く花薄。花に我が身を誘ひ行くフシ小蝶につれて入り給ふ。茲に平井の保昌が弟右京之亮。藤原の保輔同じく一子右兵衛の尉齋明父子とも。心飽く迄恣凶にて。頼光に見放され一家に背く素浪人。黨を立て衆を結び洛中

に横行し。元手入らずの切取追討へ。將軍太郎が幕下に屬し。王位を奪ふ大望。臆の太き同類廿四人引具し。並木の歩み來る如く一樣の強盜頭巾。保輔齋明を近付け。是ぞ江文の宰相が館。主君良門殿家の御紋。繫馬の幕印爲成が預かる由。門一重踏破り奪ひ取るは易けれども。青公家ばらと侮るは不覺々々。此の頃巷の風説に事よせ偽り入らん。油断するなど門打敲き武將頼光朝臣より急用のお使。門開けと罵つたり。館の内は寢入りばな何事やらんと騒ぐばかり。表は頻りに打敲く門番下部口。主人爲成卿宿直の御番お留守。御用あらば明日と聞きもあへず。イヤサ氣遣な事でなし吉左右のお使。河内守頼信公頼光朝臣の御家督に極り。詠歌の姫を御簾中になされんと結納。善は急げと夜中ながら。渡邊の綱頼みの宰領に參上せり。地早開かれよと偽るにぞ愚かの門番青侍ど

も。大門開けば易々保輔。フシ同類引連れ通りける。地奥へかくと告げたりけん頼平はつと氣も消入り。寢ほれ姿に立出づる。袂を控へ詠歌の姫これ申し頼信様。千束のお文は皆偽り浅い心のお歸りか。今聞くと頼平より。綱とやらが祝言の。頼みの使に來たといな。地兄親様からお許しの世間廣い夫婦ぞや。鶏が鳴かうが日が出ようが戻しはやらじと。引留められて出羽の冠者。其の祝言のお使が咽につまる。今は何を隠さん我は頼信にあらず。弟出羽の冠者頼平。地兄の戀路を知りながら切なき戀は我ばかりか。それなる小蝶も頼信に思ひは同じ思ひより。偽り枕交せしに存じ寄らぬ祝言の結納。宰相殿御夫婦。お請ければ密夫同然。兄嫁水に濁るゝ時。手を以てせざるの理に迷ひ。親兄の禮を素る。

頼平は。心からとも諦めんが貞女の道を背かせし。口惜しさよとばかりにて。スエテどうと坐して涙ぐむ。詠歌の姫もあきれ果てフシ暫し詞もかりしが。阿ハテ何とせう。

寝て了うての悔み言いうて返らぬ。一度穢れし此の身なれば頼信様に添ふ氣は無い。あの使の歸らぬ内こゝを連れて退き給はば。地不義の名も立つまじ取違へても變つても。殿御一人に添ひ通すが女の道。一夜の逢ふ瀬に父母と思ひ替ゆる自ら。見捨て給ふな頼平様と。抱付きしめ合ひてわりなき。中とぞ成り給ふ。ヲ、出來た〜詠歌様。兩御所の首尾は小蝶が受取つた。跡に心を残さずとも連れまして早お退き。夜明くる迄はお供せんはやく〜お出でと引つ立てられ。何處を當に頼平公詠歌の前に薄衣させ。落行く先の憂き身より、フシ跡のつらさやまさるらん。地門内俄に騒しく雨戸障子切裂く音。叫び慄く女の聲ヤレ盗人よ押入よと。言ひかひなき下郎ども小髻をはつられ眞甲割られ。下女も仕丁も朱にそみ命から〜逃けて行く。爲成卿の御臺所萩の對かひなくしく。繫馬の幕右手にかい込み抜刀。保輔がたゝむ太刀受流し

〜門外へ遁れ出で。切拂ひ飛びしさり。調ヤア世の常の強盜にあらず。金銀衣服に目はかけず。天子より預かりたる此の幕望むは曲者。呼吸の通ふ其の内はいつかな渡さん。長袖の女房と侮づり。地近う寄つて怪我するなど健氣には宣へども。詠歌の姫は何處ぞと一筋ならぬ胸の内。フシ落ちもやらす支へらる。ヤア婆婆に飽いたか女郎め。其の幕こつちへ渡さぬかと。又打ちかくるを切りほどき戦ふ後に。齋明つつと駈寄り。萩の對の太刀打落し取つて引つ伏せ捨ち付くれば。保輔陣幕ひつたくり押戴き。本望本望。そいつ刻めと言ひ捨てて門内へ駈入れば。鬚引上げ搔首せんと刀逆手に取る所へ。東西より綱公時。陰陽の龍の雲を下る勢逸散に駈來り。公時すかさず齋明をもんどり打たせ踏付くれれば。綱は御臺の塵打拂ひ、フシ痛はり忍ばせ奪る。公時ふまへし臆拊上げ。調ヤア保昌が甥の殿ならず者の齋明か。保昌が度々の療法で治らぬ盗人

病。公時が細工按摩十四經。地ちつと痛いを堪忍せいと。首ぐつと引き抜き。渡邊諸共大音上げ。調天命知らぬ國賊めら。速に非を改め。降参すれば命を助くる。地こはばらば手本は是と内へ投入れ。ちようど睨みし眼力は。フシ尺餘の築地も見抜くべし。地保輔門の屋根に突立ち。調コリヤ此の幕を翻へし。將軍太郎殿を位に即け。關白になる某降参せいと舌長し。地高位に使ふ詞を知らぬ慮外者めと。口に任する存外雜言。調ヲ、結構なる關白職。座の高いが望みならばまつかせと。地綱公時つつとより扉門かためたる。左右の柱に立ち別れむんずと握り。ヤアうんと力に任せ押上ぐれば。さしも堅く塗り堅めし。築地四五尺崩れ落ち。門は念なう大地を放れ二人が脊丈指上ぐれば。保輔飛ぶにも下は遙か。棟瓦にしがみ付き大聲上げ。調ア、申し綱様。高位高座も高過ぎて目がまふ〜。地幕指物もこれ返す。命助けて公時様。お慈

悲くくと男泣き。涙しぶきの瓦ぶき。フシ
雨やさめく見苦しき。地綱公時どつと笑
ひ。ヤイ保輔の安屋根葺。漏らぬ様に葺き
をれと。彼方へ持ち行き此方へゆすり。思
ふ程苦痛させ。柱を左右へ引き放せば。コ
ハリ門桁虹梁裏股。垂木裏板土瓦ぐわら

くどうと地に落つる。ナホス保輔が天邊脊

骨。二本の柱に打ちみしやがれ瓦礫と散つ
て失せにける。性態もなき殘黨輩。一度

に群り来る所を引寄せく首すつぽり。躊
みつけてはぼんと抜き。南方毛抜釘拔まさら

りの二人の手先。一人も洩らさぬ抜首は。
フシ酸漿ほるより易かりける。公時首を門

柱に括り付け打ち肩げ。きよよんとひよ
んのをさめの拍子。背は瓢箪噺は。

うち取る天窓の鉢叩き。フシ渡邊殿と噺す
れば。地綱も拍子にのりの道。鉢叩キ大恩教

主の釋迦だにも。涅槃の雲に入り給ふ。況
んや怨敵朝敵を。などか一人も遁すべきな

もだく。ナホス只頼め。主君の智徳我々が。

武徳も勝る源氏の御代。假令朝敵將軍太
耶。水練飛行の鱗翼を得たるとも。水に入
らば水を分け雲に入らば雲を裂き。討取る
印は此の幕の馬を味方に繋がる。綱公時
が勇猛力。四天王の巻頭巻軸末世。の筆に
止めける。

第 二

地都の富士を動かさず爰に引きよせ目がか
りの。里の賤屋も植込の木の間に見せて山

水の。唐繪を庭にうつし取るとんだ物好き
飛石の。石は白川加茂川を笥に取りし手水

鉢。乾の御殿は頼信公まだ獨寝の御部屋作
り。今宵俄のお客とて座敷々々のはき掃

除。フシ女子手業のはかどらぬ。上段書院
圍の間床は寢覺が生花の。長押鴨居も拭き

立つる。更級杉野が障子の埃鳥簀。柄さし
簾の差出口。幽晚のお客はどなたやら。め

つたに目出度いくの譯を知らねば悦ばれ
ぬ。寢覺殿様子は聞かずか。ム、此方はま

だ知らずか。お客といふは此のお館の嫁君。

其の譯はの。かねく頼信様戀ひこがれ給
ふ詠歌の前。如何に戀なればとてある事
か。弟御の頼平様が盗み出し。お二人連で
お館を駈落。行き方知れぬ騒動洛中は是沙
汰。院の御所様寂聞に達し。地伊豫の内侍
様とて詠歌様に劣らぬ美人。頼信が宿の妻
にせよとの院宣。今宵俄にお奥が入る筈。

是といふも大殿頼光様の御威勢。頼信様の
お勤のよいかから目出度い御祝言ではないか

いの。明日はお壺所の餅搗き。今宵はお
寢間でしつぽりとお二人のちもつき。地ア

ア羨しの伊豫の内侍様彌いよなうへうた
んぢや。サアゑいとフシとくおつきと

打笑へば。更級がいき過ぎ顔。上々は尋
常でお獨りの杵でもつい子餅が出来れど

も。ちちとが白は下用に使ふ味噌豆臼と地
なまめき笑ふ女郎花。フシあなかしがまし

口がまし。それはさうと此の小蝶は。今
朝から爰へ顔出しせぬ横着者。地小蝶々々

と呼びたてられ蝶は可愛や白粉を。泣きは

がしたるやつれ顔。頼信の御祝言胸に迫れ

ば氣も浮かず。返事なくく。フシ立ち出づれば。これこゝな人出来るぞや出来るぞや。上から下までお目出度事。猫の手も借りた忙しさ。其の泣き顔は何ぞ氣色

でもわるいか。御新造のお部屋の掃除疎漏に致すなど。お局の言付け人にばかり骨折らせ。ぬつくりと陰ばひりか。ア、レ西山に日もちりくお輿の入るに間もあるまい

。調こちとらが請取つた座敷廻りの掃除は仕舞ひ。そなたの役はお庭の植込み。蜘蛛の巢取つて落葉掃いて水打つて。地そして

からのらかはきやと叱らるゝ身も叱る身も。フシ私ならぬ宮仕へ。心に任せぬ憂き

ふしの竹竿取つて庭におり。蜘蛛の巢取るや取りませし思ひはつらき頼信君。外の女

に添はせじと心一つ身一つの。胸に網張るさ、がにの梢こすあくに糸引きて。八つ手に蜘蛛

の闇作り寢覺が見付けそれく小蝶殿。それ見さしやれ。ア、恐ろしい大きな青蜘蛛

。人の口へ入れれば其の儘死ぬる大毒蟲。嫁君のお部屋さき御膳廻りへ落入るまい物

でもない。早う取つて捨てさしやと。地にふに小蝶が心付き。調ア、ほんに唇へさはれば人を殺す大毒。扱も姿に似せぬ怖い物

と。地口には恐れ心には此の蜘蛛取つて内侍に與へ。我が戀の仇取らん物と一念萌す執着心。フシ蜘蛛の毒より凄じし。奥に局の聲高く。調あれく表御門より先走の御案内。伊豫の内侍様今お入り。お迎ひの手燭座敷の燭臺作法が大事。地女房達襦袢に髪かけて皆おちやくと呼ぶ聲に。ア

イくく。フシとさやめき賑ひ入りにけり。地跡には小蝶よき隙ぞと足を爪立て手を伸ばし。巢をはたと打ち拂へばいとほしくも落ち来る蜘蛛袷紗におさへ押し包み。戴きく天に捧げ呪咀の詞。調抑汝が

神通不思議人力も及ばず。野馬臺とやらん。唐土の書に糸を引いて文字を導き。日本の譽れを顯はし蜘蛛が、つて悦び來るといふ

本文もありと聞く。地又人の命を取ること鳩毒蠱毒より速かにて。善惡に渡り妙を得たる性靈。すに足らぬ汝が形に我が四尺の魂をしつかと受け留め。コハリ伊豫の内侍

を今宵の中に毒害し。戀ひわぶる頼信公と此の小蝶が縁の糸を。結び合せて玉津島。神詠の印を見せよ急々如律令と懐に隠し入れ。小襖ほらく歩み行く外面似菩薩内心

如夜及。表面に見えぬ皮一重。障子のあなたさやめき渡り。嫁君のはやお入りと數々祝ふ銚子鳥臺。松と竹との

千代かけて。千秋萬歳のナホス千箱の玉とぞ三重々、諸ひける。地世に諳ひしも一昔先

年相州猿股の城にて。朝敵となり亡びたる相馬二郎將門が。忘れ形見の嫡子將軍太郎

良門とて。兇猛強氣の不敵者父が謀叛の緒を繼ぎ。天下を覆さん計略。同腹の妹

の氏素性を隠し。小蝶と名付け頼光の奥方に奉公させ。館の様を聞き合す便も細き寛

の竹。駒の頭を兄妹が心通するさやき

竹。館たかや離れて水上みづの上の河原かはら面に徘徊まわし。妹

に知らせの短角みじかづ出し高音たかねを。そらして三重

へ吹く笛ふエの音ねも更さらけ渡る。地御館ぢのみの内小

蝶ちょうはかねて牒しよし置く。兄良門あにらの相圖あひづの笛心

に應こたへ忍しのび出でづれば。寛かんの水も人もたえた

る離はなれ庭にわ。樋口つぐちに口くちさし寄よせ。兄あに様良門

様お出ででなされたかと。地吹ぢふき込む息いきは竹

の筒つつぬけ聞き取る兄あには遙とほかの河原かはら。妹小蝶

は館たかやの内耳うちみみと白しろとは隔へたれど。間まの寛かんは詞

のかけはしフシ側そばで囁ささく如ごとくなり。地良門ぢら

竹たけに口くちをよせ。同どうコリヤ妹いもうと。頼光よりみつの四天王

のと鬼神くわんじんの如ごとくいはるれど。表うら裡らを知らぬ

一圖いつずの大將たいしやう。某あつ足許あしあとにあるとも知らず手

遠とほき所ところを尋たずね探たづし。館たかやには手に立つ武士ぶし一

人もなしと聞く。是本望ほんぼうの時節ときせふ到來とらい。しか

も今宵こんやは頼信よりのぶの婚禮こんい。上下じやうげの武士ぶしども酒さけに

酔よひ伏ふし油断あぶは必定ひつじやう。地ぢ此こゝの虚うつろに乗のりつて忍しの

び入り頼光よりみつ頼信よりのぶ易々やすやすと討うち取り。帝みかどを追お追お込こ

め王位おうゐを篡ひひ。父ちちが素懐すくわいを達たつせんは此こゝの

と。語ことれば此方こゝはと胸むねつき兄弟あに心を合あはせ

置く。巧たくまみの筋すぢもあだ花はなの色いろに引ひかるゝ小

蝶ちょうが心こゝろ。頼信よりのぶ君きみを今更いまさらに討うちすもつらし引

かれもせず。スエテ返事へんじに迷まよふ戀慕こいぼの間ま。フシ

空くうさへ暗くらき。黒書院くろじやういん。地廣縁ぢひろゑの下身したをひそ

め。傳つたひ寄よるは頼光よりみつの御臺所ごたいしよ。小蝶せうてつが素振すべ

心得こころえす窺うかがひつけより給たまふとも。知らぬ因果

の囁ささき竹たけ。同どうなう兄あに様さま。いまだ館たかやも靜しずまら

ず仕損しとんじては一大事いちだいじ。今夜こんやに限かぎる事ことでもな

し。地ぢ必かならずせくまいくと一寸いちすん遁にれに期きを

延のせば。同どう卑怯ひせつ千萬せんま後ごれたか。是非しぜい今宵こんやは

延のばされず性根しやうこんをすゑよ妹いもうとと。地ぢ洩はるゝ五

音ねに北きたの方守かたもり刀やいばを抜ひくより早く。飛とびか

かつて小蝶せうてつが肩かた先さき一いち打ちうちに。切きられてうん

と反さか返へり。同どう何者なにものなれば何なにの遺恨いこん望のぞみある

大事だいじの命いのち。地ぢ助すけけてたべと逃にげ行く髻たむげ手に

纏まとひ。取とつて引き伏ひせ又一また一刀いちたう刺さされてあつ

と叫こゑぶ聲こゑ。何事なにことやらんと平井へいゐの保昌へいさう脂燭しやくか

かけ躍たぎり出でで。是こゝはと驚おどく小蝶せうてつが深手ふかて。外

には知らぬ將軍しやうぐん太郎たうらう竹たけの口くちに耳みみ放はなさず。

妹いもうとが返答へんたう今いまやくと一時ひととき餘あまり。待まちち堪たへた

る堪忍かんにんじやう情じやう。流石りうせき武將ぶしやうの北きたの方色かたも變かりず小

蝶ちょうをがはと突つき退ひけ。同どう憎にくしい女めめエ、是

保昌へいさう今宵こんやまうけの嫁よめ君きみ。伊豫いよの内侍うちわらわの饗あ

膳ぜんに蜘蛛くもを入れ毒害どくがいの巧たくまみ配膳はいぜん給仕たまは此こゝの

小蝶せうてつ。仔細しじゆこそあらんとつけて來くるあの遣遣

水みづ。寛かんの外とほに同類どうるいありと覺おぼえたり。疑うひも

なき盜賊たうさくの引き入れ。コリヤ陳ちんじても通とほれ

ぬ命いのち。地ぢ包かますいへと責せめ給たまへば小蝶せうてつ苦し

き目を開ひらき同どう盜賊たうさくの手引てづかとは恨にくめしい御臺

所ところ。身みを八はちつ裂ききに刻きまれても白狀はくじやうする身

の上うへにはあらねども。盜賊たうさくの名なを受けては

先祖せんぞの恥辱ちじよく。兄弟あに一家いっかの名折なをりれ語ことつて死

ぬる。事ことも愚おろかや平親王へいしんわう將門しやうもんが娘むすめ。將軍

太郎たうらうが妹いもうとは自ら。父ちちの仇あだを報うぜんため問者

となつて官仕くわんしへ。狼おひ暮くせし此こゝの年月ねんげつ。地ぢ

ア、はかなき女め心こゝろ頼信よりのぶの御器量ごきりやうに絆ひされ。

大事だいじは忘れ戀こ一筋ひとすぢ外の女めに添そはせじと。詠

歌うたの前まへ頼平よりへい殿どの我が妹いもうとにて都みやこを落おし。一人

の邪麗よろひは拂はらひしに。同どう院いん宣のたまひにて伊豫いよの内侍

の祝言。重ねくゝの戀の邪魔。毒害して妬
みを晴らさんと思ふ内侍は恙なく。却つて
我が身を失ふは。戀故先祖の仇忘れし親
の野兄の爵。地當らば當れ殺さば殺せ。生
れ代り死に代り頼信と内侍の中。一念の鐵
石七重八重の隔てと成り。コハリ思ふ儘に
は添はせじと夕闇てらす眼は明星。顔色朱
に髮逆立ち。ナホス狂ひ罵り奥を目がけ飛
び込む所。保昌すはと抜き打ちに丁と切つ
たる拳の固め。首は飛んで敢なき最期女も
遁れぬ朝敵の末。フシ天爵神爵目の前なり。
地北の御方身を頼はし。内に入り込む奸
人己れと名乗り自滅するも。神明の加護當
家の武運長久の印。さす敵は將軍太郎。自
らが術にてたつた今釣寄せん。地組手を用
意し搦められよ保昌と。笈の竹に口さし
寄せ。これ兄様館の内も寢靜まり。大酒
にて正體なし前裁の外圍ひ。塀の切戸を
明け置いたり屈竟の時節。増サア今々と竟
へば妹と心得將軍太郎。でかしたくまつ
かせ其處へと言ひ返す。聲に保昌北の方
膝し合せて鏢あけ。フシ點頭き合うて入
り給ふ。地良門妹が教の如く外堀近く走り
着き。内の様體聞き耳立てし切戸を押せば
きり、と開く。仕濟したりと獨笑み入り
込む庭の勝手は知らず。立木も人かと心を
配る暗き夜の御殿の火影を自當にて。泉水
築山切所を越えオクリ寢所間近く窺ひよる。
地保昌女の衣打ち被き。味方の組手に相圖
を取つて出で向へば。近々と寄つて小聲に
なり。細小蝶か神妙の働き。親兄への孝行
此の上なし頼信の寢所は是か。頼光はいづ
くにあるぞ。増サア案内々々と立ち寄る所
を衣ぬぎ捨て。良門が弱腰しつかと抱くち
つとも動せず。胸ホ、ウ傍痛し。日本無
雙の剛の者將軍太郎を誑つて。組みとめん
とは態に似ぬ不敵者。四天王は他行。平井
の保昌といふ木葉武士よな。いはれぬ腕に
腕筋捻ぢられ。地あら肝とばして恨むるな
と振りほどく大力。ヤア忬め咽の穴の廣過
ぎたる廣言。いふ通り平井の保昌。出合
ふ己れが運の盡き。動かれば動いて見よ。
ゑいうんと締め付けて猶放さず。投げられ
てもひるまぬ力五角の荒武者上になり下に
なり人交ぜもせず揉合ひしが。地保昌が弓
手の足松の古根に踏みくじけ。立直らん。
立直らんとする際に腕もぎ放し飛んで行
く。向ふは組子の高提灯歸れば取り手の振
松明。前後を包む火の光り。遁るゝ方なき
死物狂ひ五人六人一掴み。豆撒く如く打付
けられ四方へばつと逃げ散つて。フシ恐れ
て近づく者もなし。地よし今宵は是迄と元
來し道に引つ返し立歸る。待ち設けたる保
昌岩陰にぬはれ伏して遣り過し。横になぐ
る切先將軍太郎が肚腹をかゝれ。ひるめば
得たりと太刀投げ捨て。乗つかゝり腕捻ぢ
廻し。強敵を生捕つたり下合へやつと呼
ばはつたり。コハリあらず思議や小蝶が死
骸。執念き一心骸に觸れるぞと見えし
が。生けるが如き形となつてむつくと起き。

保昌が襟際掴んで引きのくる。ナホス妄執
幽魂の神通力。五體を縛られ惱む間に。命
冥加の將軍太郎。虎の尾を踏み毒蛇の口
ハはふく通れ失せてけり。調ヤア大事の
敵を遁したる。地方人は何奴とふり返れば
小蝶が屍さしもの保昌ぞつとして指折
り放し突きのかれば。五輪の石の轉ふが
如く首と體は引きわかれ。ぐわらくどつ
と大地に響く愛着心ヲシ妬女の性根ぞ恐ろ
しき。地此の儘置かば又此の上如何なる仇
をかなすべきと。すだぐに切り亂し。同
サア遠くは行かじ將軍太郎追駈けて討ちと
めん。地者ども來れと勇みをなし振り立て
行くや松明に。明け行く星の光を奪ひ跡を
暮うて 三重

詠歌の前道行

じと浮かれ出づるぞ。ラシたやならね。空
は雪氣に鞍馬口。鬼一口に加茂山の。地雷
さへ鳴りて雨降りし昔男の芥川。ちりも厭
はぬ露の身を。草に置くてふ白玉か。問へ
ど答へず消えもせず。見上ぐる顔も見合は
すも。フシ一つ思ひに辛氣やと。いつそ下
して石道を。歩むもほんに玉篋。フシオケリ
二人へ連れたる。衣手のフシ袖から袖へ。
手を入れて。歌直に比翼のフシとりなりを。
盡きぬ契りと影映す。我が菩薩池ぞつとし
て。まだ日數經ぬ旅さへも。フシ思ひやつ
れのしどもなや。あれく峰に打ち靡き。
雪に洗ひつ風に又。削りかけにし青柳の手
ふれぬ髪も我が髪も。いつ取り上げて岩倉
や。冷泉われて。逢ふ夜の。ミ下リ歌きぬく
に。あけの睦言。今更に。うしや別れば。
袖の海。なじまぬ。昔ましぢやもの。幾
夜。重ねし情の末も。恨み焦るゝ身は戀
衣。カンせめて一夜は。ア。來ても見よか
しな。ナホス泊り定めぬ。フシ宿なれば。
いざとて誰か松が崎。オオクリ先て添ふやら添
はぬやら。ホフシ知れぬ此の身と侘びぬれ
ば。今幡枝になにはなる。何のそのくみ
をつくし戀の。瀬踏の。一入を。からくも染
めて八鹽の岡。山もあらはに木の葉ふりッ
シ残る松さへ。細々と。曉告ぐる。鐘の音
に。フシまだき鳥の。寢所を。立ち行く數
も三つ四つ二つ。又三つ五つ六つの花。
其の花の頃いつ又王生の。花盛り。ミ下リ
王生のお寺の社殿で。くくくく
合。花の盛りも。人の盛りも。合夢の夜風し
やでんく。くくくく。合。ナホス君なら
ずして誰と又。世に立榮え。フシ鉾枝村。
三つせをかけて二の瀬村此方に續く普陀落
寺道行く。振りにこととひて。百夜も同じ
つれなさの小町が名のみ古塚を。小野とは
いひて薄生ふ。フシ市原。野にこそ着き給
ふ。
地頼平そげ立つ顔ふりあげ。調なう詠歌の
姫。珠簾几帳の外見すが戀なればこそ。雪

霜の寒い冷たい疲れも厭はぬ徒歩跳足。心中といひ姿といひ。兄頼信の打込まれたも道理々々。小蝶がお陰蒙らずは今頃は兄の奥様。ひつくり返つてつい弟嫁。念力の矢に當つたからくりの的ぢやと。地跡先、フシ踏まへぬ戀の道。詠歌の姫も途方にくれ。世の中の不思議とて是程不思議の縁もなし。おの様と夫婦とは。結ぶの神のよもや粗相もなされまじ。前生の因縁か火の中水の底土灰となる迄も。添ひ果つるが女の操愛目つらきめ覺悟の前。私が事を苦になされず。世間廣う源の頼平とお身を立て、下さんせ。地女一人の身を庇ひ。お名ばし汚して下さんすなと。スエテ打ち涙ぐみ宣へば。調ヲ、我もさは思へども差當るあてもなし。鞍馬山の別當は祈念をさせし誼もあり。押し付け頼む心にて此處迄は來りしが。山中で雪に逢は、難儀至極。今少し是で見合さん。エ、口惜しい此の有様。地冬田に残るフシ鳥威。是を心の屏風几帳と。

思うてたもと打ちかけ給ふ男泣き。いや我よりも大事の御身と又打ち着する袖と袖。顔を見合せ泣き沈むフシ涙凍りて。小笹原。フシ野邊の叢と亂れけり。地冬の日脚の晝も過ぎ八瀬へ別る、小道より。小山の様な男ども六七人。手々に背負ふ葛籠半蓋。錢箱梯箱鏡立。太刀刀鎗長刀も一つに付けたる牛の鞍。のつさくと近付くは。代官の宿替かフシ旅芝居かと疑はる。地曲者ども立ちとまり點頭き囁き荷をおろし。夫婦の側へのめり寄り。調コレ女郎さん見事でやす。堪りませぬと地帯際へずつと遣る手を叩きのけ。エなめ過ぎたいやらしと頼平に寄添へば。調エ、不粹な。いはいでも知れた事。なんほ美しうても器量に惚れるこちではござらぬ。其の結構な衣服に首だけ。かうくどき掛つてからは否でも應でも帯解かす。ホ、えい若い人。あつたら前髪早い落花。ハテ立派な腰の廻り。衆道女道どちらも好物。一刀しやつふりいはせば着る物の價値がない。美しづくで裸になりや。目に角立て慘ういふも。此の様に笑ひ、いふも刺ぐ所は同じ事。二つ取りには。痛い目せぬが其方の徳。ナア皆の者。さうぢやないか。地なまみだ佛と詞できよくり。頼平とは白波のフシ直下に見るぞはまりなる。地山賊とも山立とも聞きも知らぬ詠歌の姫。魂も消えぬ。調これ申し大事のお身。地必ず短氣出し給ふなと。スエテうろく顔の顫ひ聲。調ハテ彼奴等風情に何の短氣。望みをかくる腰の物くれるからは別儀ない。地サア受取れと抜く間も見せず。先に立つたる髭男大袈裟にうつて打ち放す。ヤア侮つて先を取られた。刻めよはたけと聲々抜きつれ。三重へ切り結ぶ。地鳥獲が腕先孫吳が術。兼ね備へたる血氣の勇者。弓手馬手へ切拂へば。命を惜まぬ強盗ども。手痛く拉がれ引き色に。フシ見えたる所に。地張本と思しき大の男畔の蔭よりぬつと出て。詠歌の前を引摺み。調コリヤ

若者強張らば此の女。一刀ぎやつといはすと切先胸に押し當つるア、是々聊爾せまい。氏系園國郡に代へたる女房。粗忽するな早まるな。地手向ひせぬと刀投げ捨て給へども。氣もゆるされず手出しもならず。一生一世の進退浮沈心を焦す額の煙氣をあせる汗の玉水フシ五體をひたすぞ道理なる。張本くわんくんと打ち點頭き。今の働き。劍術稽古の手練ばかりにあらす。天骨自然の妙處感じ入る。眼中面色端武者にあらぬ見所あり。地我とても渡世ばかりの強盗ならず。御邊が如き武勇の達人を試み。味方に頼み招かん爲興かくいふは平親王將門が一子將軍太郎良門。父が鬱憤を晴らし。世を覆さんと思立ち。妹小蝶を頼光が館へ。忍び入れ置き内通せしに。顯れて敢なく討たせ。無念彌まししの骨に徹す。我に頼まれくれまいか。此の女の一命は。御邊が返答否か。應かの地間にありと人質取りし手詰の詞。頼平はつと顔色變じ呆れ。フシ果

て、見えけるが。詞扱は小蝶は妹。御邊は音に聞えし朝敵の張本。平親王將門の一子將軍太郎よな。ム、ウ。其の女も遊君妓女の賤しき類にあらす。江文の宰相爲成卿の息女詠歌の姫。其の姫と語らひしも小蝶が情の媒。我こそ多田の満仲が三男。出羽の冠者頼平。兄頼信其の姫に。心を懸けられしも憚らず馴染め。微服潛行の駆落者とはなりたれども。地御邊が如き朝敵に出逢ひ首取つて。それを眉目として兄頼光頼信の心を和け再び館へ立歸らんと欲する所。大船を呑む鯨鮫も。鐵の索網に圍まれしエ、無念口惜しやと。大地を叩き足踏し踏み砕く霜柱。百千本の劔の山。フシ微塵に折るゝばかりなり。ア、是頼平様狂亂か狼狽へてか。天道に背き朝敵に與し。身も家も立つ物か。女一人を庇うて。お名を汚して下さんすなと今申せしはこゝの事。短い契りと諦め此の儘我を見殺し。此の將軍太郎が首取つて功名遊ばせ。一味など

なされては。必ず未練御車怯と身を悶え。心ばかりをせき上げて。フシ叫び。給へど動かせず。ア頼平。一味か但し女を殺すか。返答遅くて見苦しし如何に〜と詰めかくる。エ、フシ是非もなし。地源の頼平がたとへ朝敵となり。一生を捨てればとて。召連れし女をむざ〜と殺させ。我一人の恥辱ならず。先祖六孫王迄源家の氏の穰れ。サア今日より骨肉親類の好みを振捨て。地違變なき一味ぞと。皆までいはず打ち消しく。物が憑いたか天魔の魅入れか頼平様と。叫び給ふを思立てるなと袂を口に押込み良門大きに悦び。地流石源の頼平果敢の思ひ切り即座の一味。亡父將門冥途の大慶是に過ぎず。上臈。地さこそ苦しからんとつき放せども正體なく。ステテ伏し沈みてぞおはします。ア子ウ頼平。足下は清和の庶流桃園親王の苗裔。我は桓武の正統葛原親王の後胤。王孫更に遠からず。王位を望むに憚りなし。地運に任せて義兵を上

けん契約の盃。跳子是にと牛引寄せ。差添
抜いて耳際すんとひつそぎ生血を。フシ合
子に絞り受け。詞是こそ唐土春秋の會盟。
牛の血を嘔つて金鐵の誓の法。我が朝の起
請神水同然固の盃。地年かさに良門よりと
ずんど干して頼平の前に合子をさし寄すれ
ば。押戴きずつとほし。歌血の義を結ぶ
上は盡未來變ぜぬ魂。千騎萬騎と思召せ。
地早々思ひ立ち給へと。跡先踏まへぬ若氣
の契約聞くと悲しき詠歌の前。詞これ。な
うく大將の一言は。地善惡の堺ぞやと止
めても押へても。聞き入れなければ詮方な
き。染めてかへらぬ墨子が白絲。フシもつれ
の末こそうたてけれ。地良門が物見の鬼同
丸あわたしく立歸り。詞源の頼信宿願の
ため鞍馬詣。歸るさは此の道と承り候と大
息ついて言上す。將軍太郎すくく踊り。
サアしてやつた妹が仇。彼奴を討取り軍神
の血祭。何と頼平不同心か。ヤア只今の誓
の上はお尋ねに及ばず。一味始めの證。兄

頼信が初太刀を仰付けられかし。チ、ウ満
足々々コリヤ鬼同丸。此の牛を屠り。腹の
中に深く忍び。地野飼の牛の死したる體に
見せ頼信を欺き。一太刀刺せと懇にいひ
含め。頼平伴ひ岨蔭に。オトリ忍びへ待つと
も白雪に。詞源の頼信朝臣。手廻り少々御
供の。中にも一人當千の渡邊の綱。詞直垂
の下に腹巻し。千段藤の弓に征矢取添へ
て。地御馬の口に添うたるは。さも勇々し
けに。頼もしし。ナホス。文源頼信袖を打拂
ひ。く。面白の景色やな。年ある御代の
印には。野にも山にも積もる白雪と。古歌
を吟じて行く駒の。蹄に花を踏ませては。
是も惜むか。初深雪。地手綱をひかへあれ
見よ渡邊。詞あの原に捨てたる牛の死骸。
時々腹のうごめくは心得ず。地生なき物の
動くにはあらし。我が心の疑ひもやと宣へ
ば。詞何條さる事の候べき。地怪しきを見
ながら打捨て置くべき様なしと。弓取りな
し弦道廣く引きしほり。切つて放せば羽ふ

くらせめ。すつはと立ちし矢よりも早く。
牛の腹より鬼同丸つつと現れ。エ、仕損ぜ
し口惜しやと。頼信目がけ駆けりよる渡邊
片手に引掴み。うんといはせぎうと踏みつ
け。詞ヤアねつそりの牛盗人。ちよろい工の
あめだ牛。もうく外に同類ないか。我が
君を一突きとは懐のあべかこう。地天角地
目天割自滅。牛の最期は立ち所フシ首捻切
つて捨てたりけり。地山際に一聲響き。起
り立つたる伏勢隙間もなく取り圍み。詞ヤ
アく頼信妹小蝶が仇を報ふ。將軍太郎が
恨みの劍。通れぬくリア腹々と罵つたり
。渡邊かつらくと笑ひ。何腹とは腹の
皮。一代ならず二代の朝敵。切平ぐる武將
の役。王城守護の多門天。鞍馬土産は汝が
首と地抜きつれて渡し合ふ。味方は主従三
十餘人素肌武者。敵は十倍三百餘人鎧武
者。喚き叫び入亂れ。打ち伏せ切り伏せ追
ひまくる野風。山風吹雪を誘ふ。軍は花か
フシ降る雪は。架を飛ばしてひらく。

暫時の内に野は眞白。白雪變じて紅の。死

骸を埋む尺餘の雪。よろめき打合ひ戦ひし

は。危かりける。三重。次第なり。巷軍の隣

く間に多勢大半討ち取れば。味方に残るは

主従一人勇氣挽まぬめつた切り。敵はじ物

と將軍太郎。殘黨引具し落ちて行く。ア何處迄もと頼信朝臣。追縋うて追駆け

給へば渡邊聲をかけ。盗賊半分の悪黨。

大將の御手には勿體なし。某仕らんとかけ

出づる。雪折松の小蔭よりつつと出でて

かけ隔て。頼平を見忘れしか。將軍太郎

に加擔人と會釋もなく切つてかゝる。思

ひがけなき渡邊さすが主君と容赦して。受

けながし組みとめんと。あしらふ刀勝に乗

つて打つ刀引き外し打ち落し。むずと組ん

で取つて伏せ。弦袋の替へ弦しごき高手小

手に縛め。詞はそも如何なる天罰にか。

朝敵に與し家來に搦められ給ふ。地源氏の

名折れ弓矢の冥加に盡き給ふかと呆れ。果

て、ぞ立つたりける。地起きつ轉びつ詠歌

の煙。雪踏み分けて走り寄り。なうあさま

しい繩目にかゝり給ふか。千萬いうても返

るにこそ。情知るは武士よ。我を代りに千

筋の繩。一分試しに切りさいなみ。頼平様

を助けてたもと歎きあこがれ給へども。渡

邊は見向きもせず。頼平膝する色なく。斯

かる大義に與するからは。首は獄門と覺

悟せであるべきか。今更驚く繩目にあら

ず。源氏の嫡孫頼平が身の難儀に及び。手

の裏返す根性さけ。末代の誹り無念至極。

殺さるか助かるか。今日の落着極るまで我

は啞聲。サア無言ぞと齒を喰ひしぱりッ

シ思ひ。切つたる眼ざし。地ヲ、其のお心

に定まるからは我とても一心する。一所に

生死かたづく迄物いはじ聲立てじ。夫婦同

じく無言ぞと。口をつぐみ目を見合せ言は

で物思ふ音なしの。瀧と涙は漲りて。フシ雪

は雲と解けにけり。地時こそあれ頼平の乳

兄弟箕田次郎。行方を尋ぬる旅出立。か

くと見るより息を切らして駆け着け。渡邊

をはつたと睨めつけ。科あつて我が君に繩かけし。詠歌の姫は頼

信公。御心を懸けられしといへども。定ま

る御臺にもあらねば。頼平公に於て聊不義

の誤りならず。一旦若氣の戀慕の習ひ。兄

親の禮を愼しむ。陰をし給ふまでの事。繩

をかくる科なしと解かんとする手をもギ

放し。和主が母は渡邊が爲には指渡した

伯母。然れば和主とは親しき一家なれども

心安きは私。まざく主君たる冠者殿に。

施忽の繩をかくべきか。慮外とは過言千

萬。將軍太郎に與し。御兄頼信公の鞍馬下

向を待伏し。たつた今大合戦紛ひなしの朝

敵。指でもさば御分も一味。誤りなき

伯母御前迄。罪に落すか。狼狽者と繩を控

へ引つ添うたり。ナニ將軍太郎に一味とや。

ハツ言語道斷の御所存。地情なやあさまし

やと。頼平に縋りつき驚動の涙にくれける

所に。大將頼信將軍太郎を見失ひ。齒噛み

をなし歸り給ひてヤア箕田次郎。天下の

怨敵となつたる頼平を庇ふは汝も朝敵一味

よな。纓色を損じ。朝敵一味かとはお目が

明かぬ曲がない。もとより冠者殿の乳兄

弟。大殿頼光の御眼識。頼平が後見と。仰

出されし上は死するとも同じ枕の某。落ち

失せ給ふも知らず。將軍太郎に與し搦め捕

られ給ふも知らずしては。武名永く廢り世

上の誇り笑ひ草。一家の恥辱大將の御情。

料の實否極るまで某に預け下さるべし。此

の願ひ叶はずば腹掻破り。今生のお暇と申

し切つたる荒訴訟。頼平つつ立ち箕田次郎

をはたと蹴のけ。頼信の前につつと寄り。

首討ち給へ首討てといはぬばかり。綱に向

つて首差伸べ。命を惜まぬ勇氣の振舞。頼

信目もやり給はず。■ヤア箕田次郎。汝が

申し分。弓矢取る身の尤千萬至極せり。朝

敵に極つたる頼平。暫時も助け置くべきに

あらねども。河内守頼信は女を奪はれし腹

立ち。無體に弟を切つたるなんどいはれん

も口惜し。殊に汝が老母は綱が伯母。事過

つべき者にあらず。■地お事が忠心に感じ頼

平夫婦。箕田次郎に預け置く。これ頼信が

私ならず。頼光の仰せと思ひ油断なく守

り。重ねて御下知を相待つべし。ハア、と

悦ぶ額を雪に擦付け。■其土の人の歸り

し心地。フシ繩もとく。■いざ御立ち

と頼平の手を取れば振り放ち。■コハリ積る

雪をかき寄せ。■三尺許りに押しかため。

■兩手に取つて差上げ。■地親子兄弟の天倫を

棄り。朝敵に與する上は。今日助かる命聊

本望ならず。今降る雪は出羽の冠者が魂。

其の仔細といつば。雪といふ文字にはす

ぐともきよむるともいふ訓あり。今こそ太

刀刀をもがれ。丸腰無刀の囚人となつて。

■恥辱の雪に埋もれ。名を埋むといへども見

よく。終には恥を以て恥を雪ぎ。■悪名を

以て悪名を清むる。此の詞が通るか。違ふ

か。頼平が身の果を。よつく見よと頼信の

膝許近く。かはと投げればつと碎けて

■散亂したる六の花。をちこちは皆白妙の

雪か。雲か八寒八風。人の肌骨に硬し。齒

を喰ひしばつて歸らる。敵に取つて強か

らねば味方に。招いて益もなし。邪正一致

善惡不二。一張一弛は武勇の根元傳はる。

弓矢ぞたくまじき。

第三

■狐は尺寸の穴に隠れて千里の虎を圍り。

一賢の唯々は千愚の露々を塞ぐ。武將源頼

光朝臣市原野の一戦。御家督頼信切り鎖め

給ひ帝都穩かなりといへども。將軍太郎良

門蹠を晦まし落失せしかば。五畿七道はい

ふに及ばず山林僻地の限々迄。尋ね求むる

配符の下知今や訴へ來るか。立關廣間評

定所。■一間々々の諸役人心を屈し。フシ待ち

居たる。■地爰に詠歌の姫の御父江文の宰相

爲成卿。北の方秋の對。息女詠歌の姫頼平

に誘はれ都を出で。■剩へ頼平朝敵とな

る。其の科逆鱗甚しく。朝家の裁斷として

宰相夫婦。閉門の罪に押込められおはせし

■地今日罪科極り武將頼光に。其の沙汰

すべしとの勅詔にて。左右の將監將曹等前後を圍み。頼光の御館に來臨ある。ト部

の季武確井の貞光仰を蒙り受取れば。警護衛府の官人等。ヲ大内にこそ歸りけれ。季武貞光夫婦の人を。決斷所に誘ひ謹んで。

出羽の冠者頼平野心を構へ。將軍太郎に一味により。頼信是を搦め捕り天機を伺ひ候へば。苟且ならぬ天下の大事兄弟の因は私。地朝敵征伐は將軍たる身の存する所。

死罪か流罪か古例古法に任せ。頼光が所存の通りに計らふべしとの勅詔にて。頼平は斷罪に極り候。

扱御前の御事は今日迄は朝廷の御計らひ。今日より武家に仰付らる。條。官職を削り冠裝束を削いで。夫婦共に布衣跣足の平人となし。都の内を追放すべしとの諭言もだしがたし。頼光直に面談にて申し渡すべき所。右勅詔の上は今日より士民町人同然。我々兩人承り。鳥羽大路にて追拂へとの下知。地イデ冠裝束剥取り申すと。兩人左右に取付けば是はと

ばかり北の方。押隔て聲を上げなう待つてたべ。此の度のお咎め御尤とは申しながら。宰相殿の身に取つて露程も誤りなし。頼平に添ふ詠歌の姫。娘のつりとの事ならば一つのもの申し譯。もとあの姫は宰相殿の胤にてなく。自ら異人に添ひて儲けし娘。

宰相殿へ嫁入しは詠歌の姫が五つの時。里より連れし我が子なるを。表向は宰相殿と二人が中の娘といひなし。今日迄育てしは申すに及ばず。誰々も能く知つたる事。我が胤ならぬ娘を隔てなく養育せられし。其の恩も報せず剩へ娘故に。家も身も滅す此の悔み。宰相殿は心恥かしく色にも出し給はねども。自らが心の中。悲しとも。フッ

らしとも。高きも賤しきも女は夫に威を付け。夫の恥も雪ぐこそ本意なれ。我ゆる夫の身の滅亡。此の憂き辛きは筆詞にも盡くされず。姫が親は此の母一人。如何なる刑罰死罪にも行ひ。宰相殿の御身の立つ申し

叫び。スエテくどき給へば爲成卿。ア、未練なり。胤こそわけね今日迄。娘よ父よといひ語らひしは必定。縦ば斯様の災難なく。頼信殿の御簾中になり。世に待がる。時は押黙つて實父の顔。我が子で無しとはよ

もいはじ他人さへ人の落ちめ。況んや隔てなく愛をなし。孝を盡せし詠歌の姫。今更我が胤ならずとは此の爲成は得いふまじと。制し給へど聞き分けなく。いやく。姫に實の父は無し。父にも母にも我一人。御訴

訟頼み参らすと。殿上雲井の上藤の。家來ともいはん武士に手を下げ詞を下げ爰の。聲に打付け打亂れ。聲も容儀もくづれて歎き。給ふぞいたはしき。地季武貞光哀れとは思へども詞を荒らけ。御卑怯至極。養子猶子も世の習ひ。縦へ胤腹變りても。一旦世間披露の上は親子の名は削られず。殊に朝廷にて其の役々の公卿大臣彈正臺の御設議極り。解官追放との諭言。主人頼光違背叶はず。却つて違勅の罪を重ねる

道理。地一先づ帝都を開き御託言のことわり。幾重にもあるべきこと我々は勅命主命。つれなく思召されそと。まづと奮つて冠はたと打落し装束かなぐり。詞江文の宰相爲成夫婦御追放。地役人參れと呼ばれば雜色放免。割竹鐵棒あたりを拂ひ。季武貞光跡を押へ。林を辭する狩場の鳥勢子に追はるゝ風情にて。オトリ歩み。給ふぞんあぢきなき。地百年の雪霜一身に積り。髪髮氷の銀拵へ。朱袖の大小古風に染める袴の鬢顏の襷。一理窟ある時代親仁立關に立ちかゝり。詞愚老は佐々目の少貳と申す者。武將頼光君へ直訴申す事あり。地罷り通るとすつとはひりの柳の間。櫻の間の番衆色立ちて。ヤア無禮者狼藉者。下れ退れとぞはめけば。フシ返答もせず。盤桓たり。大宅の忠正立出で。詞自分の伺候か但お使者か。御舍弟出羽の冠者頼平のお詫ならば無用。取次ぎ申すこと叶はず。地お茶でも參つてお歸りと。素氣なく立つて入らんと

す。老人けらくと笑ひ。詞取次ぎ頼む程なれば。宿所に踏反り返り。娘や孫に足さすらせ。寝ながらの一筆啓上でも事は濟む。頼光の耳へ。此の口から言ひ込む天下の大事。立關端近で打明けうか。よしと奥のとろくにひつかみ。人怯めする大將に逢はんといふも無骨なり。御臺所に對面せんサア奥方の案内々々。女中々々と殿中響くしはがれ聲。忠正居丈高になり。詞ヤア緩急至極。浪人が主持いかさま雜人匹夫とも見えず。貴人の御殿。出仕退出の格式は知る音。殊に武將の御館。地のさばり過ぎたる振舞醉狂か老翁か。引立てられよ當番衆。心得手々に取巻く鼻捻。鐵把長脚鑽狼牙琴柱。白銀磨ききならめく老眼。八方見開きにつこと笑ひ。詞怖しく。ヲフこは。蠢の様なる年寄に是程に立ち騒ぎ。まそつと強い若手の敵に出逢うては何程に騒がうぞ。鐵把長脚鑽が怖しとて。いふ事いはぬ少貳でなし。地サア打つて見よ

とちつとも怯れぬ勢ひ。將軍太郎が殘黨ひやうけ者に紛らし。我が君に近付きよらん謀。それ撲ち殺せ叩き殺せと轟めく所へ。御奥小姓聲々にこれく。詞其の者荒く致すな我が君御見參との詫意。地シイくといふ警蹕に。各持ちたる兵具を捨て。鎮まる内に御大將悠然として御座に着かせ給ひければ。無禮田夫の老人も。始めの一徹引替へて。フシ威儀を正し蹶踞する。稍あつて御大將。詞佐々目の少貳とは翁よな。終に名も知らねば面も見ず。譬へば遠き道を行くに。山坂海岸の難所あるが如く。上一人と下萬民の間は次第々々の取次ぎ。下の誠上へ通ぜずと思ふ。切なる心より所を忘れ。當番に對し我が儘を言ひたるにてぞ有るらんな。自分の訴訟か。但し頼光が政道に。邪あるを諫言の爲か。氣を鎮め心底を。残さず語れと御託の中より。老人御前の疊に額を付け。泣き萎れたる顔をあけ。アツア有難い。無禮狼藉の御咎めもな

く。心を鎮め申せとの御慈悲心。地貴人と下人との心は斯程にも變りしか。柳に木傳ふ鶯鳩の小鳥が。九萬里の空を飛ぶ。鷗の大鳥を笑ふとは。縮めが身にひつしと存じ當る。フシさりながら。上天子大臣より。眞柴かる山賤藻鹽やく蟹迄も。變らぬ物は親子兄弟の恩愛。如何なれば我が君は。御弟を憎み給ふと。申しも果ぬに御氣色變り。つつと立つて入り給ふ。續いて駈寄り。禁色の裾。しつかと縫れば怒れる御聲。何事をかいふと思へば。つきもなき親子兄弟の噂。推量に違はず頼平めが訴訟よな。何者に頼まれし。天下の鏡となる頼光が心。イヤ汝等が知るべきか案外なりと御説ある。老人憚る色なく。イヤ弟を憎むを以て天下の鏡とは申されまじ。生れ年こそ跡先なれ。弟も同じ親の血筋。兄も弟も心に變りなければ。若き時は血氣内に強く。兄親の心に叶はぬがち。其の度毎に血脈を捨てば。日本國天地人倫の道絶え果つるを。鏡

にしては受取られず。中にも頼平殿はこの若君。御母君の御愛子。是を殺しては御母への御不孝。不孝も天下の鏡か。其の上一代一度の訴訟は。何事にも叶へんと堅き契約の方もあり。武將の御身に契約を違へ給ひて是でも鏡か。愚老が目には破鏡これ申し鏡の曇りは研けば晴る。如何な上手の鏡研も。破鏡はつぐにもつがれず。天下を照らすは及びもない事。田舎の山寺の。鐘鐺の奉加に入れ給へと。賑ばかりのヲシ大口明けけんらくとぞ笑ひける。頼光御座に歸り給ひ。弟を憎むとは筋なき事を申す者かな。頼平めに連添ひし。詠歌の前の父母江文の宰相夫婦。勅詔を以てたつた今追放。況んや本人たる頼平有免叶はず。其の上一代一度の訴訟叶へんと。詞質を取つて我を蔑する胡亂者。其の契約は頼平に乳房を含めし乳母。則ち渡邊の綱が伯母。綱が未だ若年の時つれ來り。父母なき孤兒ながら筋目ある倅。弓取

に守立て。召仕へとてくれたりし其の褒美。所領は受けず財寶は食らす。訴訟あらば何事にも。一度は叶へんと契約せしは。渡邊の綱が伯母なるぞ。佐々目の少貳といふ者に契約せず。立つて歸れと宣へば。ム、ウしかと伯母には御契約ありしな。其の伯母こそは某。君にも覚えある故伯母が便りとあれば。一子箕田次郎幾度か參つても。御門より追ひ歸し御取上げもなき故に。我等直に參りしも兩三度。表裡二ヶ所の御門御臺所迄も。伯母が參れば通されず。取次ぐ人もなき故男の形にまなび。潤ひもなき雪折の枯竹のため直す如くに。屈みし腰骨押延ばし指も習はぬ太刀刀。取次ぎ頼まず無體に御目にかゝらん爲の此の有様。サア伯母が一代一度の。御訴訟として此の上なし。サア御契約は何とくと言詰め。イヤイヤ。頼光が契約せしは女なり。汝は佐々目の少貳にあらずや。罷り歸れ。地とつれなき御説。エ、理窟過ぎたる御大將。女になつて見せ申さんと。つつと立

つて袴の紐引きかなぐり。ぐる／＼解くか
常陸帯。重ねし衣裳ひらり／＼と。脱ぎ
捨つれば百年に一年足らぬ姥櫻。艶も枯木
の裸身の。乳房は賤が干蕪腰の湯文字の
紅に。紅葉しからむ肋骨肉も落ちてさゝ波
皴。いと女は骨細の膝折屈め長り。北
山嵐吹通し疊も冷ゆる大廣間。五體も凍え
がちがら／＼。顛ふ顛をくひしめ大聲上
げ。頼平公へ乳を上げお目通りに仕へし
者。異國も見ぬく御眼力よも見忘れ給ふま
じ。地佐々目の少貳と名乗ればとて。男と
女御覽じ分けてあるべきか。ようも／＼お
心づよう婆めに物を思はせらる。餘りむご
き我が君やと。かつばと伏して歎き居る姿
は地獄の繪。竹の根を掘る罪人の。罪を悲
しむ如くにてフシいたく。しくもあぢ氣
なし。伺候の人々袖引合ひ。最前の振舞
といひ善悪に強き婆。羅城門の變化が渡邊
の伯母に化け。地取られし腕取返し。鬼
さへ眞似る伯母なればフシ道理々々と呷き

ける。地奥にも斯くと聞ゆれば御臺所のお
耳に立ち。取敢ず御出あり。なう渡邊の伯
母か。珍しやゆかしや始めより聞かぬらば。
直に奥へといはん物心には嘆恨み。若い時
より慎み深いそなたが。百になつても女の
肌身いとしやよく／＼なればこそ。見る目
も悲しいあれ早う物着せよ。あいといふよ
り女房下駄上着よと。着せても押しや
り打ちかくれば押しのけいやく。イヤ着
せて下さるな。あの深山のこ猿が。形は人
に似て皮を着る故獸。皮を剥けば寸分人
に違はずと聞く。我も猿同然。大額にぬき
上げ。男わけの白髪撫でつけ。此の上に
皮着ては。君もお見知りなき佐々目の少貳
といふ男猿。其の健皮着すに。お見知りあ
る頼平の乳母。綱が伯母。御契約は違へら
る。誰か一人取合せどこへ取付く枝もな
き。木から落ちた猿婆。凍え死なせて下
されと頼ひ上り／＼。恨みくどく唇うるみ
舌ちやみ。エ、恨めしいつれない御夫婦

や。血を分けぬ他人さへ氣を痛め。いとほ
しや詠歌の姫の物思ひ。我が子箕田次郎毎
日毎夜御門に立つての御訴訟。地是等の憂
目に比べては。母が裸はフシ敷ならず。地
此の世で縋綿八重九重の重着も養ひ君の命
乞さへ仕果せず見殺しにする罪科。とても
三途河の奪衣姥に剥取らる。着て何せ
んとあたりの小袖。おしやり／＼わつと叫
ぶ聲限り。枯焦けたる瘦骨を。搾る涙は八
寒の氷といてる計りにて。御臺を始め女房
達。フシ共に袖を絞らる。地見る目に
堪へかね御臺所立寄りてお手づから。小袖
取上げ打着せ給へば。數多の女中立ちが、
袖を通しつ襟引き繕ひ前かき合せ。涙
に沈む賤機帯結べば解く。伯母が手を取り
お膝の上に引きよせて。何なう乳を含めし
誼にさへ左程迄の心盡し。産み落し給ふ御
母尼公の草葉の蔭の御苦しみ。満仲公の御
子とては御兄弟只三人。高きも低きも乳の
末とて乙は猶いとしき物。御母尼公御臨終

の今は枕自らが手を取つて。亡からん跡にも頼平を小舅とばし思ふな。おことが胎内より産み落せしと思ひ。地機みかけてどばかりにて。お目を塞ぎ給ひし面影は。今とても忘れず御在世の間は。六孫王の嫁

君。御威勢といひお身の榮華。肩を並ぶるフシ者もなく。此の世を去り給ひ御弔ひ御追善。何に愚かもなき故に。自らが嫁仕の御奉公は一つもなし。せめて頼平殿の命を申し助けず。御位牌のいひ譯なく。エ、

いひがひなき女と。未來よりの御恨み悲しくやる方なく。様々申し宥めても。二代の朝敵に與する頼平。私ならぬ朝廷の囚人。母の遺言として許しては。國家の政道暗闇

なりとの御立腹。此の上は自らも思ひ切る。頼平殿の事としてはふつつと思ひ捨て、たも。やいのく〜と上はつれなき詞の裏。推量せよと心の目ませ。御袖のかげに手を合せ。頼光の目を忍び伯母を拜み伏し拜み。頼むといはで頼むとは涙が。いふぞ。

フシ痛はしき。大將更に見違りもせず黙然として在します。御膝元につつと寄つて聲を荒らけ。エ、心強い我が君。強いばかりを勇士とは申されまじ。暴虎馮河して死するも厭はぬ大將に隨はずと。孔子も戒め給はずや。二代の朝敵に一味する。其の

頼平の身寄の我々皆同罪。サア一番に此の婆御成敗々々。獄門の木を常よりは。五尺も七尺も高々とかけさせ。政道に私なき。武將の心を一天下に顯し給へと。膝立て直

し憚りなく。フシ座を打つてこそ急きかけけれ。頼光甚だ感嘆あり。言行揃ひし義者の振舞。渡邊の綱が伯母といはんに恥かしからず。開始めよりさは見つれども所存

計りがたく。佐々目の少貳と聞き流せり。頼平が罪科。明日首を討つに評定極り助け難き命なれども。一旦の契約志もだされず。今日は二十七日先考満仲の御命日。今日より七日を限り來月四日迄。頼平が命をお事が爲に助け預くるぞ。其の間に教訓し野心

なき心底世に顯れ。江文の宰相勅勅を免され歸參あらば。永く命を助くべし。さもなれば七日過ぎて四日の曉。八聲の鶏を限り。討手を遣し首刎ぬるぞ。其の時我を恨むなど御座を立つて入り給ふ。伯母ははつと頭を下け。又繰り返す嬉し泣き。御臺

所もフシ又伏拜み。地殺さるゝを助かる恩は乳母の母なり命の母と。悦ぶ内にも七日の日切暮るゝ月日は假寝の夢。二度の憂目を兒ようかと思ひ過しの女心。コレなう氣

遣ひ遊ばすな。惡に強きは善にも強し善と惡とは溜水。導く方へ隨ふ習ひ上々吉の和子様に仕立上げるは婆が手際。策田次郎詠歌の姫君さぞ待ちかね。長居も恐れ地ヤ

アゑい〜の聲ばかり居竦りて立ち兼ねれば扶くる上藤女房達。襟口合せ一つ前。三つ子も同じ老の身は。帯も抱へも人任せ。姿は老女頭は親仁。下戸は無くとも妖物はフシ有る世なりとぞ噴出しける。なうこれ。嵐烈しき道すがら。頭も冷えんと

お心付きし御着綿。御恩も深き丸綿帽子名
残は盡きぬ藜の杖。乗物にて送らせんそれ
くくと宣へばア、勿體ない。乗物まだる
い気が急ぐ。杖さへあれば今でも二十里三
十里は、遣りかねる婆ではおじやらしませ
ぬよ。ナウ久しう腰をのして蒲かつた。思
ひの儘に屈めんとおしよほからけの杖ほく
く。つくづく思へば茨木童子は伯母に化
け。おのが腕を取返す今の伯母は男に化け。
頼平の命を助け歸る姿は又伯母御。額を
隠す渡邊の庵へ。こそは三重へ歸りけれ
フシ天が下なる。人は皆。地君が田蓑の島
近き。渡邊の伯母が言ひのぶる。七日も今
日と夕路のあだの命の朝顔は。明日迄待
たぬくだかけの。鶏限りこそフシ果敢なけ
れ。浮世の頼み。今日の日。皆腰折の詠
歌の姫。母の譲りの増鏡向へば是も名残ぞ
と。親には誰か。五月つけの小櫛の鬘水と。
涙はらくはらやに落す。フシ露の身の。最
期たしなむ。夕化粧。映す我が身はフシ母

の顔。ナウ母様。是はく御機嫌よい笑
顔拜みましお嬉しやく。御私が事を苦に
せずとも。御無事で存らへ下さんせと。ゆ
ふべの烏夕雀唄求むる聲々は。フシ思ひも
なけに羨し。地箕田次郎頼世の取り沙汰
を聞合せに。今朝より出でて立歸り我が家
を見入り頼冠り。猶引きしめ顔を包み作り
聲。ヨウウく見事々々。夕暮方の夕顔化
粧。歌の文字は三十一字それを打ちこえ三
十二相の詠歌様。大唐四百餘州の美人の開
山。楊貴妃虞氏君西施李夫人王昭君もそこ
りへく及びもない事。日本は六十餘州神
の嫁御のこのくこの花咲くや姫。富士の
裾野に竹取の翁が拾うた寶娘。衣通姫も跳
足で裸で逃げさんしよ。天から降つたら
下照姫海から湧いたら龍宮の乙姫。佐保姫
織姫天人の敷入りか世界に響へる花もなけ
れば。紅葉も及ばぬ翡翠の黒髪しんとろ
くく三日月なりの目元の地釣針。つりく
釣つた殿御はやれ扱ひら平様世界の男の命

の山賊。御沖つ白波立つ名もわざくれ。體
も尻も鬘斗を付けて進上申す詠歌の姫様。
おやくやつちやくくと。フシ響詞。地はつ
と興さめ詠歌の姫逃け入らんとし給ひしが。
能くく見れば箕田次郎。イヤア頼殿か
此方は本氣か。頼平様のお命は曉の雞限
り。年寄つた母御の心遣ひといひ。此の家
内に人心地のある者は一人もない。時も時
折も折今朝より邸を出ありき漸く今歸つて
いつにない大聲上げての戯言。人のいふ事
も叱りさうな乳兄弟のこなた。私を天人か
楊貴妃か。譽められたうない聞きたうな
い。地日頃の忠節だて皆偽り相手になるも
いまくしと。駈入る裾をしつかと取つて
頬かぶりかなぐり捨て。此の纏が戯言つ
くす偽りいふと。此方の目にも見事見ゆる
か。此方の眼に見えはせまい。此方に教へ
らるゝ迄もない頼平公のお命。雞を限りと
は七日前から知つて居る。若し頼光御兄弟
の憐み七日というて明日へも明後日へも延

びるか。都方の取り沙汰聞かんと思ひ今朝より宿を出で。地淀柱本の邊まで参りしに。なう武將の詞は編言同然。頼平公の討手として、むいき者の坂田の公時罷り下るに付き。御用船に標を立て川筋きびしき舟どめ。扱は頼平公一期の落着今宵にありと。

息を切つて歸る所。客待つ暮の君傾城が妍自慢の紅白粉。只今譽めたは譏るの裏。詞で面をくらはしたが、ちつと胸へこたへたか。痛はしや頼平君廣き世界に御身をせばめ。地末長きお命を今宵に縮め果す事。元の起りは其の妍ゆゑ。武將頼光を始め奉り。御兄弟御一門の恨みは御身一人。そのみならず御親父文の宰相殿。勅勤受けて官位を削られ。追放の身とは何故皆其の紅白粉のゆかり故。誠女の道を申さば。討手の向ふ今は際まで縋つて御意見申し。お命を延ばすが夫を思ふ眞實。此の眞實がないからは顔は美人心は佞人。地其の水くさい心とも知らず絆され給ふ頼平の。

御運の程がいたはしい。エ、見限り果てたる女中やと。齒にきぬきせず眼に角。姫君ちつとも驚かす。ハテ爰なお人はきやうとげな。頼平様のお命令背限りとは。今更驚く事かいの。元の起りは詠歌故と御兄弟御一門の恨みや。尤なれども自らが父母は。又頼平様ゆゑと嘆恨み悔みそれは互に人の習ひ。高いも低いも夫に連れ添ふ女の道は。一旦も二旦も御意見申し承引なければ是非がない。地夫婦は一所善人なれば我も善人。悪人なれば同じ悪人。先へは死ぬるとも片時も跡へは後れぬ魂。コレお侍。討死と極めては。鎧物の具爽かに出立ち。見事に死ぬるでないかいの。地まつ其の如く源の頼平が妻。詠歌の姫が最期に取亂し髪髻にも櫛の齒入れず。けはひ化粧も繕はず。見苦しい死骸といはるゝは誰が恥。亡からん跡まで流石頼平様の妻よ北の方よと。お名を汚さぬけはひ化粧。客待つ暮の君傾城の夕化粧と。一つに見る箕田次郎殿。

いとしや此方の日は眩んだのうと。ステ、心すわりし。聲高く。漏れ聞えて頼平公。妻戸荒らかに引明け氣色をかへ。母は老女の縁言尤ともいふべきに。若き武士に似合はぬ愚痴の意見。是にも非にも頼平が齒より外へ出せし詞は鐵石。金剛舍利は碎くるとも變せぬ心。女などの意見を聞くべきか。地イザ詠歌此方へと振返る後より。伯母禪尼が弓杖の村重藤。おつ取りのべて丁々。名残り情もなう悲しやと。取りつく詠歌を取つて引き退け叩き伏せ。抑曲もない御身の詞は金石より堅く。此の妻が頼光へ。御意見を爲果さんと番ひし詞は土か砂か。とつくに頭も剃りこほつ善なれども。甥子といひ養ひ君大事の弓取。もしもの事のある物と。惜しからぬ白髮の十筋右衛門に元結かけし其の徳に。此の度の訴訟を嫌ひ。關白殿の御使にも御對面なき頼光へ。婆が額に角を入れ。佐々目の少貳といふ男になりし故にこそ。七日のお命は

延ばしたれ。地最早浮世の望み是迄と刺りこほちしかひもなく。直らぬ其の根性に嘆きをもやす刺つて悔しい。乳を含めし此の婆こなたの片意地は知つて居る。善惡共にいひ出す詞變せぬ辯。そこを押付け強意見する婆が辯は覺えがゞざろ。圖サア耳ある證據に聞いてもらを。眼ある不祥に是見給へ。御父滿仲公朝敵退治の御弓。地不孝の倅を諫めの杖渡邊の伯母とおほしたら。三五の十八大きに當がちがを。圖痛はしや所縁とてあの姫君の御父。江文の宰相爲成卿。勅勤官位を削られ。都の内を御追放のこと聞きながら馬耳風ぢやの。御身を世繼に立てぬといふ頼光への恨みか。兄頼信を妬んでの朝敵か。地金石より堅き心を婆が瘦腕に。打砕いてくれんと又振上ぐる。腕に縋つて暫しとばかり。涙ながらに聲を上け。圖二十四孝の伯愈が。父の杖の弱りを歎きしは孝行。今頼平が滿仲の御持弓に打たるゝは不孝の咎。理非善惡を辨へぬ我な

らねど。地焦りたる種は芽を生ぜず落花枝に歸らず。たとへ命は助かりても。嫂となるべき詠歌の姫を妻として。のめくと兄弟諸武士と座を連ね膝を組み。世上の後指生きたるかひのあるべきか。圖よし是は味方一家の恥ばかり。將軍太郎は桓武天皇の末孫。出羽の冠者は清和天皇の流れ。互角の大將晴業の契約。牛の血を神水として言ひ交せし詞を變じ。地源の頼平が女を人質に取られ詮方なく。太刀打の勝負は叶はず偽りの一味をして。當座の難を通れし臆病者。卑怯者源氏の武道の奥知れたりと嘲り笑はれ。他門に恥を残してもおめくと存へて。兄頼光の御爲になるべきか。圖又我契約の詞を違へずあつばれ源氏の殿ばらは。詞を變ぜず信を堅く守つて。討手を引受け仁義の刃に死したりと。譽を取つて死したるが頼光の爲になるべきか。地勿論親子の意見一々理に當つて尤なれども。武士の上には道に背きて道に當ること。圖譬へば黄金は寶の最上なれども。高山に登り咽渴して疲るゝ時は。千金萬金も一杯の水には劣つたり。地錦は上なき美服なれども六月の炎天には。一重の麻の太布に蜀紅の錦も及ばぬぞや。然れば何事も時ぞと思へ夏來ては錦に勝る麻の小衣と詠ぜし古歌も。武士の身にひつしと當る。圖市原野の合戦に雪といふ文字のよみこる。恥を以て恥を雪ぎ惡名を以て惡名を清めんと。兄頼信に雪を擱んで投付け。番ひし詞を無になしては兄弟はなほ弓矢の意地。泣寝入りには了はれず。此の間を料簡し片意地とばし恨むるな。地討手の武士は誰人か禮儀を以て向はゞ。我も禮儀を以て尋常に切腹し。首を討たるべしと思ひしに。武勇自慢の猪武者公時が向ふとや。圖定めて朝敵退治なんどと罵るは必定。其の時某將軍太郎良將が副將軍。出羽の冠者頼平と名乗つて。腕の力太刀の金の續かん程。思ふ様に切り散らし。地恨みの腹十文字に切り破り末代に名

を残さん。ナウおことが乳を含め養育して。

人となせしは誠の母も同然。木石ならぬ頼

平が志をむけにして。恩を忘るゝ事はな

し。恨みを晴れよとばかりにて伯母が袂に

縋り付き。スエテ聲も惜まず泣き給ふ。地

御有様の痛はしさ。地伯母は覺えず聲を上

け。ナウ其のお心をとつくに打明け給は

ぬ。あつばれ御器量大將やそれとも知らず

此の婆が。鼻の先の走り智恵。悪難いひた

る舌たゞれ打擲の皺腕も。折れよ腐れよお

主の罰天の罰。免させ給へ若子免して下さ

れと。持つたる弓をからりと捨て抱き寄せ

無でさすり。泣き口説く老のくどくどは文

字餘り文字足らず。詠歌の姫も纏も。共に

涙のフシ雨ぞそぎ座敷も。浸すばかりな

り。■ヤア泣くまいく。此の曉の八聲の

鶏。養ひ君の初陣目出たき折から。地女な

れども家一番の老武者。討手の武士に無禮

あらば直に此所を軍の場。若子を初め一

人も生き残らん者はなし。地コレ箕田次郎。

門にしつかと錠おろせよと。地涙を止めい

ざわつさりと最期の酒宴。■御有に婆が一

さし舞はう。今こそあれ我も昔の十七八。

地油とろりと紅粉鐵漿白粉。生れ付きの所

體に。戀がありしゆゑ。いかな男もしなだ

れかゝる柳腰。今は海老腰ヤアゑい〜と

立上り。涙に濁るむしやら聲。歌七つにな

る子がいたいな事いうて。殿が欲しいと

謠うた。殿よりも花よりも。養ひ若子のお

命が。ま一つ欲しやいとほしやと。スエテ又

泣き沈むを取直し聲はり上げ。歌おらが若

い時や腕になま疵たえなんだ。今でも二つ

や五つはあんだ。樊噲だ。張良だ。樊噲張

良よそならずとオクリ打連れ入りし奥座敷。

■兵の交り今ぞ名残のフシ酒宴なる。フシ

風が持てくる。■一村雨。地窓打つ聲に打

交り。用ありけに門の戸を忍びやかに叩く

音。胸にこたへて詠歌の姫酒宴の座敷をそ

つと抜出で。走り寄り小聲になり。■夜更

けて誰ぢや何者ぢや。ム、ウ咎むる人は慥

か娘の聲と聞く。詠歌の姫ではないかいの。

ヤア扱はお前は母様か。ヲ、奇特に聲を覺

えてぢや。成程そもじの母江文の宰相が妻

萩の對。地おゆかしや久しぶりて。御無事

なお顔が見たいゆかしいと。隙間を求め尋

ねても。錠は堅く塀高しいつ蟋蟀の踏み明

けし。壁の破れに差覗けど闇の夜の。村雨

晴るゝ星影に見れば竹笠うなだれ。身は養

虫の養きて。サア明けて〜の囁きも娘の

耳には雷の。スエテ落ちかゝるより悲しく

て。■仰せなくとも明けてお顔も見られ

ども。風も通さぬ貫の木海老錠。日こそ多

けれ夜こそ多けれ。今宵のお出では何事

ぞ。地頼平様のお命は此の曉の鶏限り。私

とても遁れぬ命。■聞けば悲しや私故に江

文の家も絶え父母共に勸勤とや。地一災起

れば二災起る何事も前世の因果と。思ひ諦

め下さんせ。討手の来るに間もあるまい早

早歸つて下さんせ。エ、おいとしやとばか

りにて。スエテ壁に取りつき。戸に縋りフシ

聲をも。立てず泣き給ふ。聞さればいの頼
平殿の今宵討たれ給ふとは。世間の流布に
隠れなし。それに就いて来たわいの。宰相
殿の勅勤もそまじに連れて。頼平殿の所縁
ゆゑ母こそは血を分けたれ。宰相殿はあ
かの他人。種もおろさぬ子故の難儀。さす
か公卿の心清く色にも出し給はねども。地
母が身になつて見や面目ないとも悲しいと
も。夫に向つて一言も泣くにも顔は上げ
られず。聞けば今宵頼平殿は首を討たれ
給ふとや。頼光は武將の役目兄弟でも他
人でも。朝敵討つは其の咎の事。珍しか
らず手柄にならず。長袖の宰相殿頼平の
首討つて差上げ給へば。朝敵と縁切る證。
勅勤免許もとの官位に立還り。江文の家も
立つべしと。刑刑部省の内縁にて内證を聞
きし故。討手の向はぬ其の先。頼平殿の
首を貫ひに來たわいの。身に代へて夫を
思ふ女心。母も同じ身なれば苦いも辛いも
知りながら。酷い事いふと思やるな。頼平

殿を討たすればそなたの方には孝行といふ
道も立つ。サア手引して首尾よう討たす
るか。但し仕損する合點で踏込むか。地此
の二つが叶はずば世の母が自害して。門
外に屍を曝すともすごくとは歸らぬ。時
も移る短い返事どうぞくと打鳴らす。鏝
音の夜半のこだまの胸先に。響き渡りて詠
歌の姫我が夫の身の大事。今宵に迫る其の
上に。又親の難儀何れを何れと捨てがたく
返答にと胸つき案じ煩ふ間を待ちかね。調
サアく返事はどうぞ。母が死なうか切り
入らうか。今宵の半時は尋常の十二時より
大事の刻限。地母が一世の頼みごと分別ど
ころちやあるまいと。急ぐ程此方は狼狽へ
ながら。いかに死身なればとて母の手にか
け夫の命取らせては。女の道は皆徒事背け
ば不孝と思ひ極めし初一念。五音をかへて
笑ひ聲。調申し母様。其のお望みなれば能
い所へござんした。幸ひ頼平様最期の酒宴
の大酒。アレあの障子の内に前後も知らぬ

高枕。死人を切るも同然。さりながら箕田
次郎親子の人の目が早い。私が燈火消すを
合圖に忍び入り。暗處の印には頼平様のお
つむり。永々の慎み長髪のお月代。山伏の
様なが手に觸るを討てば少しも仕損じな
い。地必ずおせきなされなと聞きもあへず
エ、嬉しいく。調夫にかへて親への挙行。
槌に母が恩にきる。地此の念力で塀を越す
か。此の杉を傳うても本望違ゆるは覺えが
あるサア忍び入らうイヤくく。調八聲
の鶏の啼く迄に聊爾があつては。預り人の
不念越度。此の上にな急ぐ事ないと。地賺す
内にも心迄せき來る涙の玉櫛笥。長刺刀
の刃より思ひ切る心の刃切れ惜しげなくふ
つつと切りてうば玉の髪黒髪嬋妍たる。
髪も額も時の間に。刃り捨て薄露の間を待
つも我が身の障子の内。ギンオクリ明けて。
入るこそ。フシ哀れなれ。地門には母の萩
の對姫の契約頼みにて。今やくと胸にせ
く心に永きしだりを。鶏を待つ間も久方

の空や明るくと見渡せば南無三寶。討手の上使とおほしく高提灯星斗の如く。十騎許りの人馬の音。見付けられては我が本望の妨けと。蓑笠取つて投捨て一足に小躍りし。塀の腕木にしつかと取りつきひらりと女の身も軽く。塀覆ひに打ち跨り。形を濟め息を詰めフシ忍び居るこそ危けれ。堀程なく金時召具の兵士に鎖の肌着。鎗印馬印具足の唐櫃下人に負はせ。火影に輝く兜楯其の身ばかりは威儀を。烏帽子直垂杖を銜んで行くが如く。上下騒がずおとなしく。徐々と打寄せ門しと叩かせ。箕田次郎纒母が禪尼に案内申す。出羽の冠者頼平君將軍太郎に與し。今日七日に至りて非を改むる御心なきに依つて。御自害を勧め御首を討つべしと。坂田の公時上使として參着。萬に一つ各違亂あるに於ては。恐れながら是非なく一矢仕らん爲。兵具用意致すといへども是は世間の人口。武者の作法を塞がん爲ばかり。只今

にも野心を翻し。御兄弟御和睦公時が願ひ此の上なし。さるによつて鶏を待たず前廣に參上致すこと。幾重にも御意見を加へられ各諸共に御歸洛の。御供願ひ存ずると神妙にこそ述べにけれ。邸の内にはすは公時よ油断すな。彼奴に似合はぬ禮儀の詞。猿の烏帽子狼の十處くふなく。慮外せば赤面首さらへ落せとひしめけども。門外には聞かぬ顔床几立てさせ袖かき合せ。悠悠としてフシ控へける。塀の上には萩の對背を伏せ内外考へ見て扱妻じや此の體にては。頼平の首よも我が手へは入るまじ。一番鶏は寝はれて鳴かぬか。よし仕損ぜばそれ迄と塀の上にさし覆ふ。松の茂みに顔さし入れ息の限りに張上げ。鶏の啼く音を二聲三聲。家慶幸くと虚音を欺る人の聲。四境に聞えて誠の鳥もばらばら。はなやかかこそ。謠ひけれ。門外門内。はやと色めく其の隙に小庭にひらりと飛び下り見れば。闇の火は消えたり煙が合圍は

是なりと。搜し寄る手に押明けて入るとも人は白張の。障子をさつと血に染めて。朝敵將軍太郎一味の隨一出羽の冠者源の頼平を。江文の宰相爲成一の太刀を討つたりと。高らかに呼ばはつたる。家内もあわてふためく音。公時大きに苛つて割る。ばかりに門打叩き。響き渡る大聲。討手を差置きなま公家を引込んで頼平の初太刀を討たする箕田次郎の法知らず。渡邊の伯母の娑婆塞けの。狸婆の生年寄。公時に鼻明かせ手振で都へ歸さうや。門明けに汝等頼まぬ。公時が手打の鍵は見よとゑいやと押す力に。塀の脇腕がね搖ぐ所をかばと踏めば。貫の木中よりふつと折れ。扉歪んで開けたり。公時が提灯込み入つて庭上は白日。禪尼驚き走り出で一間の障子押開けばこはいかに。纒が右手の肩先したたかに切られながら。髪切りの詠歌の煙をかい込み。血刀持つたる萩の對同じく取つて押へられ。エ 仕損ぜし無念やと悔み悶

604

ゆる有様。禪尼も是はと動轉しッシ呆れて
詞もなかりしが。地鏡縁先に膝行し。母
ぢや人も御上使も合點參らぬ其の筈く。
健氣にも江文の宰相殿の北の御方。頼平の
首討つて差上げ。朝敵一味に縁を切つたる
證を顯し。勅勘を申し開かんと姫君にわり
なき頼み。痛はしや孝行と貞節の二つの道
に迫り。其の身が母の手に懸らんと。髪を
切つて男の頭に。做び給ふ次第第一々立聞
きし。地親子の切なる志見るに忍びず暗處
に。母君の手を取つて頼平の名代。一太刀
切られし此の疵。誠の頼平こそ討たずと
も。血刀を其の儘にて披露あらば。明らけ
き上の御裁斷勅勘御免疑ひなし。此の上は
姫君御身を全う頼平の御先途を見届け給
へ。萩の對の介抱我が母と公時に任せ置く
と。地親子をゆるめ押しのかげ打刀抜くより
早く。弓手の肋にがはと突立て引廻し。
出羽の冠者源の頼平生害サア地首を討て公
時ヤレ首をうて公時と。いへども更に合點

ゆかず。さすがの公時きよろく顔母も是
はと手を打つ所に。頼平走り出で給ひ鏡
が。膝の上にとつかと居かゝり。やい氣
違ひめ。最前より奥に控へし頼平を。隠
れて出合はぬと思ひしか。公時が振舞を始
終見届けんと猶豫する内。無用の汝が身代
り。我命を助かり逃げ延びんと思ふ程な
らば。公時に鬼神が加つても。太刀先にて
切り開き。やすくと生延びるに何の事。
身代りなどを頼まぬ誰が思にきぬ徒腹。地
エ、しなしたりくと。スエテ齒ぎしみ恨み
怒らる。地鏡わつと泣き出しエ、情なや。
夜光の珠に一つの瑕。今鏡が切る腹御身代
りと御覽する。御眼力こそ小さけれ。總
じて主君の身代りなどと申すは。御幼稚の
御曹司若君か。扱は上臈女性にこそ命代り
し例もあれ。遮つて死にたがる殿に何の身
代り。源の頼平と名乗つて首討たる、鏡は。
天下の爲の生害人。地數ならぬ鏡が天下の
爲とは事をかしく。推參がましく思されん

是には一つの物語。我が君も母上も。ヤア
公時初め供人も。鳴りを鎮めて、ッシ聞き給
へ。地物語の種是なりと。地袖に入れし錦
の袋より。懸緒の切れたる烏帽子一頭取出
し。是はこれ。去年霜月御家督定めめの召
の時。鏡が着せし烏帽子。其の夜は内戚外
戚の歴々。四天王以下在京の武士役々所簡
の高下に隨ひ。一人も残らず伺候の夜。小
寢殿の燈を消され白羽染羽の矢幹の御闖。
御臺所上段に着かせ給ふゆる立ちまふ人は
皆女中。其の中に彼の小蝶が艶色。並ぶ方
なき情の風俗。若氣の某御勝手で一献酌ん
だる微醉まぎれ。座敷も間の現なく。小蝶
が裳にひつたと縋つて戯れしに。彼の女お
のが懐中のヒ首を以て。ふつと切つたる
烏帽子は是。切られしは此の懸緒なり刺へ
小蝶大音上げ。天下の御大事評定の座敷。
誰かは知らず暗紛れに。此の小蝶に縋り戯
れしなだる、不行儀侍。無禮放肆の證の爲。
烏帽子の懸緒を切取つたり。サア女中火を

燈し懸緒を切られし。それを證據に御詮議あれとはしたなく喚き罵る其の間。南無三寶纜が武名は是迄。生きて恥を曝さんよりと刀の柄に手をかけしが。イヤ〜死しては恥辱を誰が雪がんと。思返せど死ぬる外せん方なく。五體の汗は直垂を通し百千萬に氣を碎く。折しも頼平公聞きつけ給ひ必ず〜率爾に燈火あぐるな。頼平が思ふ仔細あり。此の座の面々上下老若を限らず。一々烏帽子の懸緒を切れ。切り揃ふと一度に聲を揃へて案内せよ。其の時燈火あぐべしとの御詞。違背に及ばず片端より残らず懸緒を押し切り〜。我も各同音に。各切つて候と申し上ぐれば御前の女中。燈臺燭臺御座敷は日中と輝けども。残らず懸緒を切りたれば誰が小蝶に切られしとも。互の心を探り合ふばかりにて。其の座の武士に一人も悪名恥辱は。地ヲシ取らざりし。此の御仁徳情の御恩の忝さ。須彌山を吹んで大海を飛び越ゆる世はありと

も。ステエいかでか報じ盡すべき。地あはれ此の殿朝敵退治の御進發もあれがな。御馬の先にて討死せんと。時節を待ちしかひもなく朝敵退治は扱置き。却つて朝敵となり給ふ。歎きは我が身一つぞと。纜が心の底を知つたる者は。天が下に此の烏帽子只一つ。産んだる母も今日が日迄かくといはねば知り給はじと。見やれば母も目を見合せ。ヲ、うい事したとばかりにて。平伏し歎けば姫君親子頼平君。無意氣と名を得し公時も。涙見せじと提灯のヲ陰へ廻るぞ道理なる。地聲いきどしくすたきながらコレ公時。天下へ抛つ纜が一命。牛渡馬物敢取の皮惜し〜とは存せねども。地此の上にも殿のお心和らがぬ其の内は。我は修羅道の奴苦みを増すばかり。母母ぢや人公時頼むは是一つ。地なき跡にも御意見絶えず。朝敵一味の契約を切り給へば。夫を修羅の矢先の楯につき。苦みを免れんと口説けば母もわつと泣き。地ナウ頼平様あんまり我強

い曲もない。今生に息の通ふ内。將軍太郎に契約の詞を讀し。御兄弟和睦との御一言を聞かせてたべ。其のお詞を願の糸烏帽子の懸緒につき合せ。未來成佛の寶冠の紐として。極樂浄土へ着せて遣りたいわいのとて。ステエかつばと伏して泣きければヲ共涙の。顔振上げ。我偏屈に凝固つたる心より方々の意見を聞かず。あつたら武士を殺す事。頼平が一生の後悔今日かくいふも無益の詞。地將軍太郎と契約を打破り。只今より兄々の御味方ぞ。氏神正八幡も照覽あれ此の詞は違へぬ。恨みを晴れよと宣ふ内より。ハアはつと猶せきあへぬ親子の涙。とめて纜につこと笑ひ。恨みなく恨みなき悦びの死とは纜が最期。サ介錯介錯公時。葉侍の首をいかめしげに。武將の御覽に入るるは恐れ。我が首討つて溝瀆へも踏込み。只只此の烏帽子を上覽に入れ。此の趣の言上頼む。サア首討たぬか公時。地エ、息がきるゝ氣をますますか。恨めしい

公時といへども白洲にむすどと坐し。地仁義忠孝揃ひに揃うた侍の。首の討ちやう俺や知らぬ。婆様此方討つて下されと。地獅子王の如きフシ公時も不覺の。涙に咽びける。地次第に五體の血はもれて沈み入る氣を猶息はり。ヨヤレ此の上は片時も婆様に用はなしサなぜ討たぬ討つてくれぬか。ヨイく介錯頼まぬと。地腹の刀をすつばと抜き首筋に押當て。兩手をかけて南無佛と口に佛名兩眼に。母の顔見る目を塞がずまじろかず。首に生顔残しながら落つれば人一人同じ。ワアわつと天に呼ばはり地に叫ぶ。さしもの母も前後にくれ。あへなき首を抱き上げ。なう五つ年の乳はなれより。久しうて母に抱かれたナアと。スエテ身に添へ歎き。伏しければ。地公時たまらず大聲上げ。手も口も揃うた武士の生粹。エ、残念や生け置いて。貞光季武綱公時に續を加へ。頼光の御内の五天王といはせいで悲しい。あつたら者をと身もなえく。我を

忘れてすゝり泣く。頼平君を始め姫君親子心なき。供の若黨仲間迄。顔打上ぐる者もなく。フシ歎き侘るぞ至極なる。地内は歎きのまだ夜深きに外は明けゆく隙白く。時も移れば頼平君涙ながらに烏帽子を取上げ。日本武士の頭に置くべき侍烏帽子。今日鏡が情かけ緒の諫によつて。頼平心を翻す段。公時具に披露して御免の御説相傳へば。地其の時某舅宰相夫婦を誘ひ伺候せんと。渡す烏帽子を公時が首の用意に持たせたる。三寶に粧ひのせ。拳々服膺敬ひ捧けお暇申す母禪尼と。いへど答へすかこち聲。母とは誰が事子のある者こそ母とはいへ。地今日より子とはありもせぬ孤獨の婆。辟事な宣ひそと首を。肌身に抱き伏す姫君親子弔ひ涙。江文の家の立つこと皆此の人の御恩ぞと。いふより外はさらばともいへで信夫のあら鷹も。翼しをるゝ公時が。立端に迷ふほのく明け袖の雫や朝露の。芝蘭の園に入る人は止めねど袖に薫あ

り。岷崙山の塊はみがかぬ玉の光りあり斯かる。忠烈賢臣の出づるも源氏の大將軍。文武の徳の高きによると歎きを。とどめ歸りけり。

第四

地古の七の賢き人も皆。竹をかさは變りなき御代を樂む心あり。坂田の公時太刀と烏帽子を臺に盛り。頼光の御前に跪き。某討手を蒙りし頼平君に御首二つ候。一つの首は天下の堅め。國家の柱鐵の根柢となる御首。まつた一つは朝敵與黨の御首。地則ち此の御首討取つたる印に。懸着なしの烏帽子一頭。血の附いたる抜刀は江文の宰相殿。朝敵與黨の縁切れたる印。委しき仔細申すもまだるく此の一通に公時が。童丸の昔より手習ひ嫌ひ。がさくさ流の口上書。讀めかぬるは御推量に御覽願ひ奉ると。御前に差上ぐる。地大將繰返しく熱寛あり。頼平は兄弟にひいて。公の御用にも立つべき器量と見届けしに。思ひも寄

らぬ此の度の罪科。悔むに所なかつしに。
いしくもしたりな。地人丸赤人の名歌も。

聞く人なければ、ヲシ歌人の名顯れず。伯
牙が琴も鍾子期にあらざれば。名を知る

ものなし頼平が徳を感じ。恩を重んじて天
下の爲に命を捨てし。箕田次郎綱が心ばせ

こそ可愛けれと。忝くも御大將 スエテ涙に
咽ばせ給ひける。爲成卿夫婦誘引の由。

それく是へと御訛ある。公時悦びお次に
立ち。夫婦を伴ひ ヲシ上座に勤め参らす

る。頼光御覽じ。長袖の御身ながら武士
に劣らぬなされかた。朝敵の縁切れたる

證據委細に奏聞せば。地二度御歸京御心安
かれと宣へば。夫婦はあつと手を合せ。

只よき様にとばかりにてヲシ嬉しきも亦涙
なり。遠侍に聲高く。季武貞光將軍太郎

を生捕りしと。地呼ばはり騒ぐ程こそあ
れ庭上にひつすゆる。御大將甚だ悦び給

ひ。御彼奴音に聞く不敵のわつばよな。
父將門關八州に變り自ら愼して。平親王

と號し百官百僚を立てたる程の逆意だに。
我が朝神孫の神武に碎かれ。滅亡したる事

聞傳へて慙もなく。前代未聞の朝敵天の責
め逃るゝ所なし。一先づ獄屋に繋ぐべしと

宣ふ所に。地頼平夫婦斬切髪にてかけ出で。
御勅當御免の上は彼等風情の朝敵。誅戮は

我が掌の内にあり。御存する旨候へば彼
奴が命暫く頼平に。預け下さるべしと申し

捨てつとつとより。汝市原野にて詠歌の姫
が一命を助けられ。一味徒黨の契約を變

ぜぬ證據。一旦の命を助け置く今より後は
敵と敵。戰場に鋒先をみがき汝が首を。頼

平が切先に貫くまで儘に預ける。サア歸れ
と縛の繩引きちぎる。良門つと立ちホ、

ウ見事々々。地天晴源氏の大将。契約を變
ぜぬ本心感じ入る。重ねての參會は一戦の

時さらばといひて立ち歸る。頼光暫しと止
め給ひ。御汝も鬼畜にあらねば善悪は知つ

つらん。親の恥辱を雪がん爲の逆心。しほ
らし優しいで汝に賜せん。親將門が定

紋繫馬の族印。陣幕源家には無益の長物。
汝が爲の守神サア得さするぞと。地庭上に

投げ給へばおつ取つて押戴き。御古今獨歩
の名將と音に聞きしに違ひなし。先祖の遺

寶を賜はる頼光の大恩。我仇を以て報すべ
し。地是より直に葛城山に立籠り。時を移

さす旗を上げん。外の敵對數萬騎ありとも。
望む所は頼平一人。體は源氏に歸るとも

首ばかりは良門が。永き味方に付くべきぞ。
ヲ、大言も廣言も命あつて後のこと。助け

置くはちつとの間。首を預けた損ふな。汝
が首も預け置く。ヲ、長吠えするな返答は。

我が眼中にありと睨みつくればうんともい
はず。眉毛も裂けよとくわつと見開く眼玉

睨んで。左右へぞ三三。ニ上リ。眼ながかれ
と。何思ひけん。世の中に。名残を雲に吹

きとめよ。止めてかひなき花の香を。合。
袖に包みし小笹の籠。こほれやすさよ我が

涙。共に鳴きつれ。歸る雁。餘所に見な
して。思ひやるこそ。などか。ナホスヲシ心も

かへるかな。お伽の衆のつれ歌もたゞには
あらぬ多田の御所。頼信の御臺所伊豫の
内侍。過ぎし頃より例ならず打臥し惱ませ
給ふゆゑ。渡邊が妻岩藤を始めとして。木
幡らん菊おしやなの前打揃ふ四人連。いは
ねどしるき四天王の思はく達。夫は兵是
等は品者通り者。桂襦の裾長郎下。フシ御
寢所近く相詰むる。中麿の少納言奥より出
で。何れも奇特の御機嫌伺ひ。内侍様の
御氣色。典樂衆の見立てにも及ばす。夜
晝となく暫くも御寢なればはや大熱。おび
え魂ぎりそゝろ言。萬一嫉妬魅入れの業
か。もし怖いお夢かなどと伺へども。とか
うのことも仰なく次第にお疲れ見る目の
悲しさ。各方の發明で面白をかしようひ廻
し。御容態も聞かまほし。又和氣の法橋
見立には。もとお氣の結ほほれ。何がな
興あるお慰み。御心だに放じなばお薬も廻
らんとの事ゆる。不調法な歌三味線。お
氣は晴れずにお頭痛でも引起そかと是も氣

遣ひ。何ぞ晴れやかな大いなお慰み。皆
皆つれ添ふ殿達から世間廣う見るお衆。ど
うぞ御趣向頼みますと。地餘儀なき詞に四
人の女房。一度にはつと頭をさけ。ハアど
うがなな。ハア何とがなと。フシ思案評定
取々なり。地公時が女房おしやなの前遠慮
なくすつと出で。仰せの如く此の度の御
氣色。何とも心得がたきとて。頼光様御
夫婦頼信様の御氣遣ひ。鬼取りひしぐ我
我が夫の武勇にも叶はぬは病論。寄合うて
は額に皺。女房仲間の評議には。どうでも
是はお悟氣の凝り。男の手癖足癖も。私ら
が様ながりはりは嚙付きも仕かねず。又下
下の夫婦かけ向ひが恪氣諍ひは先づ叩き合
ふくらはし合ふ。地道具三つ四つ打割れば
さらりと胸が晴れるけな。上々方はうは
すんべり。お心ではかりくよくくく
思の積り。それにお氣晴らしとはア、聞え
たお療治。先づ私が存じより申して見ま
しよ。見すく心を引立つるは相撲々々。

先づお座敷に四本柱括り枕を並べ土俵をつ
き。四人の我々眞裸で。二人づゝ西東へ立
分れて大關。腰元衆の内で關脇小結を選
み。残りの女中皆前相撲肌の物は男の通り
緞子縞珍の二重廻り。ア、さりながら。さ
がりを取つて引く時中にこたへの張合ひな
く。臨へすつと外れては氣の毒か。いつそ
夫も一景であらうか。季武貞光のお内儀。
地何とおほすといひければ。らん菊木幡顔
打赤め。ヲ、さんない一景も半景も。娘子
供の時ならばこじほらしうもあれかし。持
ち古した墨の肌。腰に廻した肌の物脇へす
つと外れては。手負烏見る様で。フシ凄じか
ろと噴き出す。中に木幡は才覺者。調すべ
ての病人晝は紛るゝ方もあり。兎角暮れて
のお慰みと思案致すに。毎年七月十六日。
東山の大文字都では珍しからず。地此の築
山にうつし秋知り顔の夕景色。御覽に入れ
ては何とばしあらんといへば岩藤。二人
の御趣向残る所はなけれ。私は又思ふに

は。昔衣笠山に白布引きはへ。夏の雪を御覽せし帝もあり。お庭の梢に小袖をいくらも打ちかけ。四季の草木菊女郎花の染模様。縫織紋の梅櫻。一度に咲ける風景お氣も轉ずる道理。是は何とお局様。

何れも一趣向。兎角書付を以て何はんと。人々を伴ひ御寢所の。オクリお次の。遺戸をそつと明くる屏風の中。夢現なき内侍の聲。わつと驚はれ呻き身悶え寢返りに。

皆立寄りやうくと抱き起せば力なき。未央の柳よわくと御髪重げの御息つき。女房だちも諸共に打萎れてぞ見えにける。岩藤諫めて。常々細いお心に何ぞ怖いお夢かな。必ずお氣にかけられぬ。神佛の夢想の外は皆あだ夢。莊子といふ唐の博識さへ。

地夢の中に胡蝶となりしと承ると。いひもあへぬに内侍はつと色變り。胡蝶の夢とは心得ぬ。扱は自ら夢の中に。まさな言はしいひしよな。恥かしさよとばかりにてそゝろ。涙の御顔はせ。お氣弱い。

胡蝶の夢とは詩歌にも數々。お心にかけらるゝは何故。總じて今度のお惱み心許なき事のみ。お心包まず仰せられ。お胸晴るるが即ちお療治お樂もまはる筈。御慰の爲にとて何れも趣向物すき。此の内お望み遊ばせと御覺に入る。日録。繰返し打守り誠に各心盡じ。返すくも。フシ淺からず。取分け此の書付に。調衣笠山の花小袖。梢に

四季の花の光り。共にゆかしき詠めならん。加急いで用意と宣へば。承つて女房達。數の小袖を取揃へ。梢々にかけてける。歌先づ初春の。空色を。これ此の枝へ。フシひらくと。又眞先かけて梅玉椿。かゝれやかゝれや藤波も。勾簾山吹の裾模様。柳すゝ竹柳に燕。あざみたんぼ。

若。草を。かけし枝ぶり。吉野の初瀬の。櫻も。爰に三河の。杜若。五色の糸の色々を縫の。牡丹に玉を取る。獅子の手毬。小手毬。躑躅とも見よ。紅鹿子。白い絞りは卯の花やかに。松も檜も杉も榎も。紅梅

もみ裏うこん紫。コハッうら吹き返せば淺黄櫻ひわ櫻。うす櫻八重櫻鹽釜櫻瀧櫻。一重櫻や小櫻のあまへて見ゆる姥櫻とも御覽せと。詞の花も姿の花も。春の山路秋の野邊。目前の。フシ興ともいひつべし。いつに内侍の笑ひ顔。調かう見た所は誠の花に變らぬ。目の覺めた物好き。殊に皆の衆の。思ふことなうわさくわさく。地機嫌よければ。連れて心も氣も輕いと。手を引かれて築山にかゝりし小袖。どれもく。しほらしい模様やと。御手に觸れたる萩桔梗。菊に群れとぶ小蝶の縫お目にかゝればハア、怖。爰にも又小蝶かと。わつと一聲手足も顛ひ御色變り。スエチかつぱと轉ひ伏し給ふ。人々あわて抱きかゝへ。オクリお寢間に休め参らする。地四人あきれ溜息ほつと。調中にも岩藤打領き。合點したく。最前胡蝶の夢の話にもぞつゝなされたお顔持。今又小蝶の縫紋にてお目のまふは只でない。地御病氣は小蝶が魅入れ合點か皆の衆それよと

一度に大聲上げ、憎つくい女め慮外な恨
み。目に物見せんと立ち分れ駈廻つても
何をあてど、又集つてどうせうと手に手
を組合ひ頬づかへ。木幡（むか）即座の工夫を廻
らし。ナウこれくく。屈（く）屈（く）一の思
案がある。幸ひ今宵篝火の大文字。もと
此の東山の（とうざん）大文字といふ事は。七月魂祭
りの聖靈（しやうりやう）の。冥途の道を照して送り返す送
り火（しやうりやう）、さもなければ魂婆（たま）に迷ひ止まると
て。十六日の夕暮は京中加茂川筋（かものがわ）に群衆を
なし。聖靈の送り火（しやうりやう）これについてお歸り
や。くくと聲々に呼ばはる夫（おとこ）になぞらへ。
婆（おば）婆（おば）に迷ふ小蝶（おと）が妄執（まが）の魂を送らば。妄
念（まが）の雲晴れ立去つて内侍様の御本腹。疑
ひあるまじと思ふが何れもなんとといへ
ば。一度に横手を丁ど出来たく。地サア
時刻が来たぞはや急げ。柴（しば）よ附木（つけぎ）よ松明
と。手（て）々に騒（さわ）ぎ夕日影。はや暮れかゝる
遠寺の鐘心も。すめる三重（さんじゆう）へ。歌聖靈の送り
火是についてお歸りや。くくくく。

秋ならぬ秋こそ来たれ。黄昏（たふし）時の淋しけ
に。フシ築山の陰。ほのめくは。群（むら）の螢か
明星（あかり）か。影は三つ四つ松明の。數も四人
の女房達。フシ負けじ劣らぬ。山の腰（こし）、コハリ
東西上下一どきに。一畫（ひと）一點麓より。追上
りては又峯より。傳（つた）ひ集り彼方の谷。此方
のをさき一つに寄れば。地大文字。フシ赫突
たり。無明の闇を照らさんとの。高野大師
の御誓ひ。方十丈の御筆畫。フシ今もあり
く有難き。安養世界淨土寺村。爰に移し
て彌陀來迎。助かり給へ。南無聖靈。南無
阿彌陀佛と回向して。フシ宿直所（しゆくちやくじよ）に立歸る。
銀河晴れゆく初更の天。コハリ消えかゝる文
字の内より。一團の火焰烈々と空中に翻（ひら）つ
し。ナホス落つると思へば忽然と。フシ小蝶
が。姿顯れたり。天（あま）帯（おび）浮きたる雲の行方を
ば。く。風の心に任すらん。歌風の心も
白雪の。消えかへりても落瀧津（おちたき）。岩波高
く。せき返す戀慕の。フシ闇に吳竹（くれたけ）の。夜毎
に通ふ築山の我が身にもゆる片思ひ。人こ

そ知らね嫉ましやと。フシ障子に。荒くおと
づる。ッレ内侍夢覺め胸とゞろき不思議
や誰そと問ひ給へば。シテ圓是は院の御所に
仕へ申す命婦（めいぶ）にて候ふ。扱も内侍例ならざ
る由聞召し。唐（から）の大和の妙藥を賜はり。自
ら持つて参りしなり。地戴（たい）き疑ひ。フシ給ふ
なとよ。ッレ地夜陰（ぢやいん）のおとづれ物凄く不審
ながらも立出でて。見るも恐ろし夢の小蝶
スエテ驚き。魂（たま）ぎり入れば追駈け怒れる
聲。シテ愚かの人（ひと）の有様や。惱（うれ）みをかくる
も我がせこが來べき臂（うで）なりさゝがにの。蜘蛛の
振舞かねてより我がなす業とはしら絲
の。くるや千筋の絲筋に五體を擲め苦め
て。ひつ立てく引立てられ。ッレ逃げん
とすれど亂れ足の。フシはひ纏はるゝ。葛（くず）
葛（くず）恨み包むも洩れやすき。囁（ささや）き竹の直（ただ）なら
ぬ。其の身を悔（くは）の千度八千度。シテこちは百
度百千度。エハフシうきねに泣かせ泣き明か
す。ッレなう恐ろしやをその蕩（たふ）子（こ）悋（ちん）氣（き）はお
のが。心の闇の水暗（くら）き。澤（さわ）の篝火送火に付

きて立去れ歸れかし。シテいや如何にいふとも盡きせぬ恨の心の鏑矢。怨念力の張弓に射て落さん連理の枝。二人嗔恚邪見の斧鉞を打立てく合。しつていく。

伐木とうくとうくとう。枝も梢も打ち折り打折り打拂ひ。魔道に沈んで、ヨハリ浮む世もなき我が眷屬の。長き奴とせんものをと。又引立つればナホス息も絶えなく、フシ引かれ巡るぞいたはしき。君は嫁入の。花やかに。我は地獄の門出に。氷の刃は劔の山。ツレ綾や錦のとのる物。却つて焦熱大焦熱の。炎に身をば焦す苦み。シテ二三九度は二河白道。蓮具履フシ渦巻く炎漲る白波。庭の梢のさつくく。池の水音どうくく大地。却つて、潮り。高天碎けて落つると見れば猛火と燃え。電光激して雷霆すさまじかりける。ナホス、フシ次第なり。フシすはや事ぞと四人の女房長刀かい込み飛んで出で。内侍をいたはり寢所に入れ眼を配り立つたる所に。シテ、

しろにすつくと、フシ小蝶が形。一人六臂の變化を顯はし。眞具履汝知らずや我そのかみ。南閩浮州に縋り。葛城山に年を経る土蜘蛛の精靈なり。大日本を横領し魔界になさんと。將軍太郎が心に加被しかひも情の道に奪はれ。屍ばかりは泥土となんぬ。猶魂魄は五行造化の氣にとまる。一念只今思ひ知れとはつたと。睨むを怯まぬ恐れぬ四人の女。ツレ如何ぞ汝王地を侵す冥罰神罰。身を亡せし前車に懲りず。地後車の罪業生々はてなき惡毒虫。羈絆を切らんといふより早く四人が長刀。裾を拂へば。シテ飛びあがり。ツレ右手を切れば。シテ左手へ開き。ツレ後をなけば。シテ前に忽ち。早業輕業縦横無盡。ツレやるな遁すなあまさじ。三重洩らさじ。聲を合せて四人が中追取りまけば。二人形は失せて盛んの猛火。ハツミツ炎々燐々燐々たり。ツレ南無三寶仕損ぜしと。ステ呆れ立ちたる庭の面。花も焦る、紅梅の。木の間にきよろりとけ

らけら笑ひ。霞を踏んで輕きは梅が香。ツレ重きは惡業。二人撻む枝々。フシ歩むともなく行くともなく。二人あれか是かと又影失せて。爰よ彼處と眼を配ればあれを見よ。二人御階の元によつきと立つて小手招き。此方へ戻れば雪か霰か雲間の月。四方八面前裁築山追うつまくつつ。隠れつ見えつ業通自在。ツレ長刀投捨て手取りにせんと駈寄れば。シテ化生も六臂に追つつまくつつ。今煩惱の犬追物。眼の光りは羅計火星。閨に向つてつく息は、ハツ、虹の。かけはしフシ長廊下。五歩の細殿十歩の樓。尋るかたも築山の。ニハコヘリ山は鐵城水は精劍修羅の巷にいざ來れと。四人を一度に引締めくなくれば留る振ればしがらむ。捻合ひへし合ひ山を劈く變化の勢ひ。陸地に船漕ぐ。ナホス四人が力ゑいや。くくとひく息つく息。惡風吹きかけ砂を飛ばし。炎の煙の蔭に隠れてオクリ姿は、忽ち、フシ失せにけり四人の女も。地勇氣を碎き茫然となつたる

所に。シテ御家督頼信朝臣。平井の保昌相
具し駈付け給ひ。桃園重代膝丸の御太刀。

内侍の枕の守に立て。虚空に向つて大音上
げ。怪は徳に勝たずと知る。たとへ變化

化生雨となり風となり。千萬に轉化して
障碍をなすとも。地天孫附屬の天子の威光。

源氏の武功に加へ四海に施さば。刃に血ぬ
らず戦はず他方萬里に追散らさんと。雲間

を睨んで立ち給ふ。聲をひとしく山河草木
動搖して。五百機たてる蜘蛛の糸。重なる

雲に夕立の篠を亂すに三ツフシ。異ならず。
フシ彼方此方に立ちまふ内。御寢所の内震

動鳴動是はとあわて駈寄れば。二人コッ膝
丸おのれと鞘を拔出で。刃の電光猛火の稻

妻。變化の眞甲はつしと打てば。血煙はつ
と漲る瀧津瀬。恐れて御殿を去るよと見え

し。シテ今より又も來らじといふかと思へ
ば忽ちに。フシ内侍の御氣色本復本望。人

人悦びざめく聲。空には刃の閃く光り。
二人逃行く化生を追駈けほつめ。雲に登

れば續いて分け入り飛行自在の合。名劍寶
劍。名も今の世に蜘蛛切丸と威徳を。した

ひ血をしたひ。變化の根を切り葉を枯らし。
治まる御代の。民安樂。十萬貫を腰に付け。

千歳の鶴に乗り。雍州の都に樂しめる其の。
樂みを樂むも今此の。御代に生れあふ人は。

猶こそ樂しけれ。

第五

一粟土も木も。我が大君の國なれば。いづく
か鬼の。やどりなる引。地劍の威徳に切拂

ひし。土蜘蛛の血を慕ひ來る葛城山。平井
の保昌討手を蒙り。籠を取巻く數百の軍兵

フシ霞隱れに支へける。例の氣早き坂田の
公時。變化流行の蜘蛛なりとも高が虫。太

刀も刀も入るべきか。踏潰してくれんずと
藪へし折つて竹箒。打ちかたけたる煤掃き

出立ち。フシ不敵にも亦馴けたり。地跡に嘶
く轡の音諸軍に先立ち獨武者。萌黃匂ひの

甲冑弓箭。とりかひ栗毛に一鞭あて歩ませ
しが。公時を遙かに見駒打寄せ大音上げ。

討手の大將保昌が目に見えざるは變化の所爲
か。君命の矢先受けて見よと弓弦しごいて

討ちつがふ。ア、龜相するな保昌。變化で
も蜘蛛でもないコレ。俺ぢや。朝霞に顔が

見えぬか赤ぢや。公時ぢや。率爾するな
と狼狽へる。保昌それとは知つたれども彼

奴が持病の先驅。躡は爰ぞと頭を打振り。
イヤ〜くはぬ〜。變化の通力我が眼

をくらし。公時に化け近付き寄り引裂き
捨てんとは愚か〜。よし又誠の公時にも

せよ。大將の下知を待たず軍令を背く拔駈
け。射落して誤りならずと又引きしほれ

ばこれ保昌。目見知りごしにそりや胴欲。
今からふつり拔駈けしよまい。片意地も

いふまいまんがちに首も抜くまい。其方の
いふ事何でも聞こ。地もう堪忍してくれと

天魔を欺く公時が。保昌にこなされ。荒氣
も出さぬ誤り顔。蜈蚣に唾嚙に。フシ藜皆夫

夫の敵樂あり。地保昌はいだる矢先をゆる
め。危ふ候坂田殿と。地互にとつと大笑ひ。

貞光季武綱諸共後馳に近付き。是々兩人あれを見られよ。葛城山の絶頂に。繋ぎ馬の旗陣幕。將軍太郎が出張の城廓。頼信頼平御馬を出され搦手へ向うたり。地變化も敵も一日仕事。時刻よきぞ大手より攻めよくと下知すれば。法螺を吹き立て太鼓を響かせ開の聲々三重攻め登る。フシ名に負ふ山は。地險難險岨岩に取りつき行先は。藤か葛か細引か引渡す蜘蛛の絲。大木古木十重二十重。張つたる網に月日も漏らさず。闇々暗き木の間より。コッパあら恐ろしや土蜘蛛の。眼は明鏡八つの手足に生る毛は。釘を植ゑたる如くにて出入る。息に火焰を吐き。地纏れ出づればわつと恐わ引返す。顔に蜘蛛の巢身をからむ絲に苦む軍兵ども。八つの足に引寄せく。血を吸取られ死するもあり。網にかゝつて惱むもあり。フシ誠に稀代の惡蟲なり。地坂田の公時走り寄り。調ヤア執着深き小蝶が魂魄。兄良門が出張の城を守護するか。地蜘蛛の

巢の亂抗逆茂木引破り。太郎めが首取らんと箒取りのべしゆみく。巢をなぎ拂ひ打拂へば。又顯れて毒氣を吐き。腹に袋の子持蜘蛛。調ヤア人民を殘害し。喰ひ肥えたる女郎蜘蛛。紙にひねつて袂に入れん。地一昨日来いと戯れて。飛びかゝれば形は消え。フシ残るは。袋ばかりなり。地公時きつと見。調應に似せて臍をまくと扱もでつかい子袋。大佛殿の灰の蓋と地蹴散らせば蠟とさけ。其の色青蒼たる小蜘蛛ども。幾千萬の數をつくし這出づる。簇々と群がり集つては區々單々と別れ散り。這ふかと見ればすつくと立ち。蜘蛛かと思れば小鬼の形真中におつ取り込め。小手に飛びつき足に纏ひ取捨て拂へど群り寄る。踏みのけ蹴飛ばし殖立つれば。山陰暗き梢を傳ひ。おのが身を焼く蜘蛛火の光り此處に灯しつ彼處に消え。般の姐己が火を愛し。火山を盡すに三五異ならず。地我に張り者も持てあつかひ。調三日風が吹かねば日本國を張り

塞ぐと。いふも理仰山や夥し。地一つづつ殺すは手間費やしと。竹箒斜に構へさらしりくさらく。地岨陰岩蔭蔭寄せはかゆき面白やと松風につれさつさと。箒にかけて掃き捨つる。フシ風に蜘蛛の子散らしける。地公時がさらへる間に谷を隔て、渡邊の綱。貞光季武搦手へ攻め登り。朝敵奥力の惡黨ども腕限り切盡くし。將軍太郎を除さじと大手の坂へ追來る。先には公時待ち迎へ遁るゝ方もなき所に。コッパ小思議や小蝶がありし形。影の如く顯れて。良門に。ナホス地附添へども。四人が眼にさへぎらず太郎は妹の神通力。五體に加はる身は鐵壁。調公時ござれ綱ござれ。季武貞光かゝれやくと欺けば。四人目くばせよる所を事ともせず引掴み。地搦み右手へ投げのけ左手へ蹴散らし八方睨んで立つたるは。フシせん方なくぞ見えたりける。

地保昌を眞先立て出羽の冠者頼平。河内守

頼信公遙かに聲かけ。調ヤア〜其の者凡身ならず。小蝶が精魂土蜘蛛の通力加はると覺えたり。地今に始めぬ此の太刀の奇特を以て。切拂はんと抜き放し押戴き。

調源氏の氏神正八幡。哀憐擁護を加へおはしませと良門目がけて投げかけ給へば。地小蝶が形消え失せて眞の、フシ形蜘蛛切の。不思議を見るも神慮の加護。得たりやお

うと綱貞光。將軍太郎を組みとむれば。公時季武士蜘蛛の。背に跨つて動かせず。頼平頼信走り寄り。朝敵退治土蜘蛛退治。仇も恨みも切りほどく。御連枝一所に頼光

頼信頼平の。家富み榮え國繁昌盡きせぬ。源氏の御代永く萬々。歳とぞ祝ひける。

七行大字直之正本とあざむく類板世に有といへども又うつしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくならず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直の正本にあらず故に今

此の本は山本九兵衛治重新たに七行大字の板を彫りて直の正本のしるしを糺せよとの求めにしたがひ予が印判を加ふる所左の如し

京二條通寺西江入町

竹本筑後掾

本竹

教博

正本屋

山本九兵衛版

大阪高麗橋壹丁目出店

山本九右衛門版